

平成 8 年度

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

蔵人遺跡

垂水遺跡

片山芝田遺跡

1997年3月

吹田市教育委員会

## 序

甚大な被害をもたらした、平成7年（1995年）1月17日の阪神・淡路大震災から、早2年の月日が経過いたしましたが、その一刻も早い復旧・復興が進みますよう願っております。

埋蔵文化財包蔵地における復旧・復興にあたっては、その円滑な推進と埋蔵文化財の保護をいかに図るかが大きな問題となっておりますが、本市におきましては関係者の方々のご理解とご協力のもとに発掘調査を進めてまいりました。

今回、報告いたします調査は市内でも被害の大きかった市域西部の蔵人遺跡におきまして実施いたしました4件の確認調査と、垂水遺跡及び片山芝田遺跡の発掘調査です。この内、垂水遺跡と片山芝田遺跡の調査地点は従来は遺跡の範囲ではありませんでしたが、開発に伴って発見され、遺跡範囲の拡大、新規発見の遺跡として調査が行われたものです。

今後、復旧・復興が進むにしたがって、埋蔵文化財の保護については困難な問題も多いかと思われます。被災された方々の状況に鑑み、可能な限り迅速な対応を行っていきたいと考えておりますが、一方で、埋蔵文化財が私たちの祖先から受け継いできた貴重な遺産であることも考慮し、関係者の方々のご理解をいただくよう努めていきたいと考えておりますので、ご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

平成9年（1997年）3月

吹田市教育委員会

教育長 能 智 勝

## 例　　言

1. 本書は、国庫補助事業として実施した、平成7年度（蔵人遺跡、垂水遺跡）及び平成8年度（片山芝田遺跡）の緊急発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 発掘調査地点は次のとおりである。

蔵人遺跡 1次調査 吹田市江坂町2丁目496、495-2・3

2次調査 吹田市江坂町2丁目600-1

3次調査 吹田市豊津町931-3

4次調査 吹田市豊津町608-1・609-1

垂水遺跡 吹田市垂水町2丁目609-1

片山芝田遺跡 吹田市片山町4丁目2374-1

3. 発掘資料の整理作業は吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施した。

4. 本書の執筆は第1章、第2章1・4、第3章2～4を増田真木が、第2章2・3を西本安秀が、第4章を田中充徳が、第3章1を海辺博史が、第4章4(2)を花崎晶子が行った。

5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。

6. 発掘調査においては櫻谷伸治・梶山昭・田中満子・田中敏章・寺辻正治・宮寄謙三・若村正博氏をはじめ、多くの方々の協力を得ました。また、蔵人遺跡出土和鏡については、大阪市立博物館 前田洋子氏よりご教授いただきました。記して謝意を表します。

---

### 調査参加者名簿

調査主体 吹田市教育委員会

調査指導 大阪府教育委員会文化財保護課

調査担当 田中充徳・西本安秀・増田真木

調査員 湯浅直子

調査補助員 赤塚亨・五十嵐進・岡野拓矢・河村耕平・近藤晶子・高田蘭吏・立見淳哉・中川匡彦・中田広子・長谷部裕子・山根賢士・山本恵里・高寺愛子

## 目 次

第1章 調査の契機.....	1
第2章 蔵人遺跡の発掘調査.....	2
1. 蔵人遺跡1次調査の成果.....	3
2. 蔵人遺跡2次調査の成果.....	4
3. 蔵人遺跡3次調査の成果.....	8
4. 蔵人遺跡4次調査の成果.....	10
第3章 垂水遺跡の発掘調査.....	11
第4章 片山芝田遺跡の発掘調査.....	24

## 図版目次

- 図版1 蔵人遺跡1次調査
- 図版2 蔵人遺跡2次調査
- 図版3 蔵人遺跡2次調査
- 図版4 蔵人遺跡2次調査
- 図版5 蔵人遺跡3次調査
- 図版6 蔵人遺跡3次調査
- 図版7 蔵人遺跡4次調査
- 図版8 垂水遺跡(1)
- 図版9 垂水遺跡(2)
- 図版10 垂水遺跡出土遺物
- 図版11 片山芝田遺跡(1)
- 図版12 片山芝田遺跡(2)
- 図版13 片山芝田遺跡(3)
- 図版14 片山芝田遺跡(4)
- 図版15 片山芝田遺跡(5)
- 図版16 片山芝田遺跡(6)
- 図版17 片山芝田遺跡(7)
- 図版18 片山芝田遺跡(8)
- 図版19 片山芝田遺跡(9)
- 図版20 片山芝田遺跡出土遺物

## 挿 図 目 次

第1図 調査地点.....	1
第2図 蔵人遺跡調査地点.....	2
第3図 調査区平面図（1次調査）.....	3
第4図 調査区土層断面図（1次調査）.....	3
第5図 調査区平面図（2次調査）.....	4
第6図 調査区土層断面図（2次調査）.....	5
第7図 出土器実測図.....	7
第8図 出土鏡拓影及び断面図.....	7
第9図 調査区平面図（3次調査）.....	8
第10図 調査区土層断面図（3次調査）.....	9
第11図 調査区平面図（4次調査）.....	10
第12図 調査区土層断面図（4次調査）.....	10
第13図 垂水遺跡調査地点位置図（S=1:5000).....	11
第14図 調査区平面図.....	13
第15図 土層模式図.....	13
第16図 調査区土層断面図.....	14
第17図 1次面平面図.....	16
第18図 2次面平面図.....	17
第19図 S D 2 平面図・断面図.....	18
第20図 出土遺物実測図.....	20
第21図 土器器皿寸法分布.....	22
第22図 片山遺跡位置図（S=1:5000).....	24
第23図 調査区配置図.....	25
第24図 土層断面図.....	27・28
第25図 遺構平面図.....	31・32
第26図 落ち込み 2 検出状況平面図.....	33
第27図 出土遺物実測図(1).....	34
第28図 出土遺物実測図(2).....	35
第29図 出土遺物実測図(3).....	35

## 報告書抄録

ふりがな	へいせい 8ねんどまいぞうぶんかざいきんきゅうはくつちょうさがいほう
書名	平成 8年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報
副書名	藏人遺跡 垂水遺跡 片山芝田遺跡
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	田中充徳 西本安秀 増田真木 海辺博史 花崎晶子
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)384-1231
発行年月日	西暦 1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"/>	東經 °'\"/>	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろうど 藏人 1次	すいた し えさかちよう 吹田市江坂町 2-496,495-2・3	27205	85	34° 45' 38"	135° 29' 50"	19960304～ 19960305	33	建物の 建築
くろうど 藏人 2次	すいた し えさかちよう 吹田市江坂町 2-600-1	27205	85	34° 45' 38"	135° 29' 50"	19960311～ 19960313	32	建物の 建築
くろうど 藏人 3次	すいた し とよづかちよう 吹田市豊津町 931-3	27205	85	34° 45' 38"	135° 29' 50"	19960319～ 19960321	30	建物の 建築
くろうど 藏人 4次	すいた し とよづかちよう 吹田市豊津町 608-1,609-1	27205	85	34° 45' 38"	135° 29' 50"	19960326～ 19960327	26	建物の 建築
たる 垂 水	すいた し たるみちよう 吹田市垂水町 2-609-1	27205	86	34° 45' 51"	135° 30' 00"	19960314～ 19960319	40	建物の 建築
かな やまと しば た 片 山 芝 田	すいた しがたやまとちよう 吹田市片山町 4-2371-1	27205		34° 46' 5"	135° 31' 50"	19960604～ 19960723	449	建物の 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藏人 1次	集落遺跡	中世	なし	なし	
藏人 2次	集落遺跡	中世	溝・土坑	土師器、瓦器 銅鏡（和鏡）	銅鏡出土
藏人 3次	集落遺跡	中世	井戸	瓦器、瓦質土器	
藏人 4次	集落遺跡	中世	なし	瓦器、瓦質土器 土師器	
垂 水	集落遺跡	中世	溝・土坑	瓦質土器 土師器	範囲拡大
片 山 芝 田	集落遺跡	古墳時代 平安時代	掘立柱建物・落込 土坑・溝・ピット	土師器、須恵器 黒色土器、瓦器	新規発見

## 第1章 調査の契機

阪神・淡路大震災に伴う復旧・復興事業は、その被害の大きさから時間を要しているのが本市の現状である。特に被害の大きかった市域西半部では、復旧・復興の動きは遅れている状況であり、平成7年3月に倒壊建物の解体後、今後の開発に当って、事前に遺跡の展開状況を把握するための確認調査を蔵人遺跡において4件実施した（吹田市江坂町2-496・495-2、江坂町2-600-1、豊津町931-3、豊津町608-1、609-1）。また、建築工事に伴う事前の発掘調査としては、同じく3月に垂水遺跡で1件（垂水町2-609-1）、平成8年度に入ってから、6～7月に片山芝田遺跡（片山町4-2374-1、他）で1件の発掘調査を実施した。この内、垂水遺跡の調査地点は遺跡範囲が拡大されたものであり、片山芝田遺跡は新規確認の遺跡である。



1. 蔵人遺跡 2. 垂水遺跡 3. 片山芝田遺跡  
● 調査地点

第1図 調査地点

## 第2章 藏人遺跡の調査

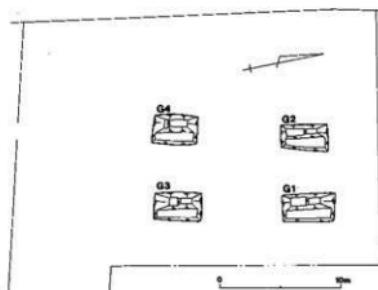
藏人遺跡は市域西端部の沖積平野に立地する古墳時代（前期）及び中世を主体とする複合集落遺跡であり、平成8年3月に江坂町2丁目496、495-2・3（1次調査）、江坂町2丁目609-1（2次調査）、豊津町931-3（3次調査）、豊津町608-1、609-1（4次調査）の4か所において、確認調査として調査を実施した。



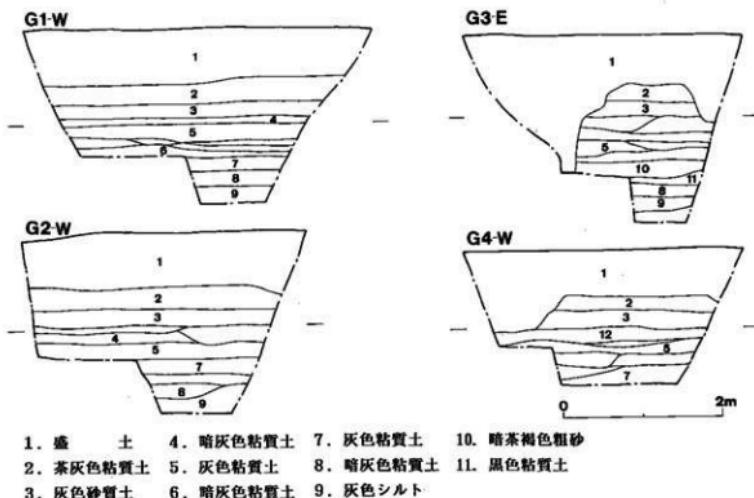
第2図 藏人遺跡調査地点

## 1. 蔵人遺跡 1次調査の成果（江坂町2丁目496、495-2・3）

調査は平成8年3月4日及び5日に調査区4か所（G1～G4、計33m<sup>2</sup>）を設定して、実施した。調査では、現地表下2m前後まで調査を行ったが、高川の氾濫等の影響を受けたと考えられるシルト層及び粗砂を多く含む粘質土、砂質土の複雑な堆積が続き、明確な遺物包含層及び遺構は確認されなかった。しかし、現地表下1.3m前後で確認される灰色粘質土層は各調査区で認められ、比較的安定した堆積を示しており、隣接地の調査状況から、この面が中世の耕作地となっていた可能性が考えられる。



第3図 調査区平面図（1次調査）



第4図 調査区土層断面図（1次調査）

## 2. 蔵人遺跡 2次調査の成果（吹田市江坂町 2丁目600-1）

### 1. 調査の経過

今回の調査は、埋蔵文化財の確認を目的として平成8年3月11～13日にT1～4の試掘トレチ（合計約32m<sup>2</sup>）を設定し、順次機械掘削、人力掘削を実施した。その結果、T1・T2で東西方向の溝、T3・T4で南北方向の溝を検出するとともに、T3では遺存状態の良好な和鏡を検出した。これらの写真撮影・図面作成等の記録作成後、埋め戻しを行い調査を終了した。

### 2. 調査の成果

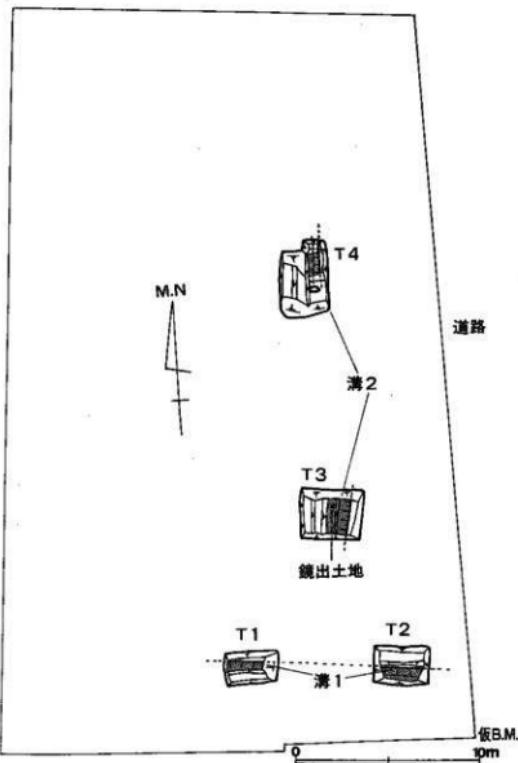
各トレチの土層序は、  
基本的に、I層 盛土（現代）、II層 耕土（現代水田）、III層 灰色系砂質土、  
IV層 淡灰色系砂質土（中世遺物包含層）、V層 灰色砂質土（中世遺構検出）、  
VI層 灰色系砂質土（中世遺構検出）、VII層 黒褐色砂質土である。

T1・2のV層から東西方向に走行する溝（溝1）、  
T3・4のVI層から南北方向の溝（溝2）を検出した。

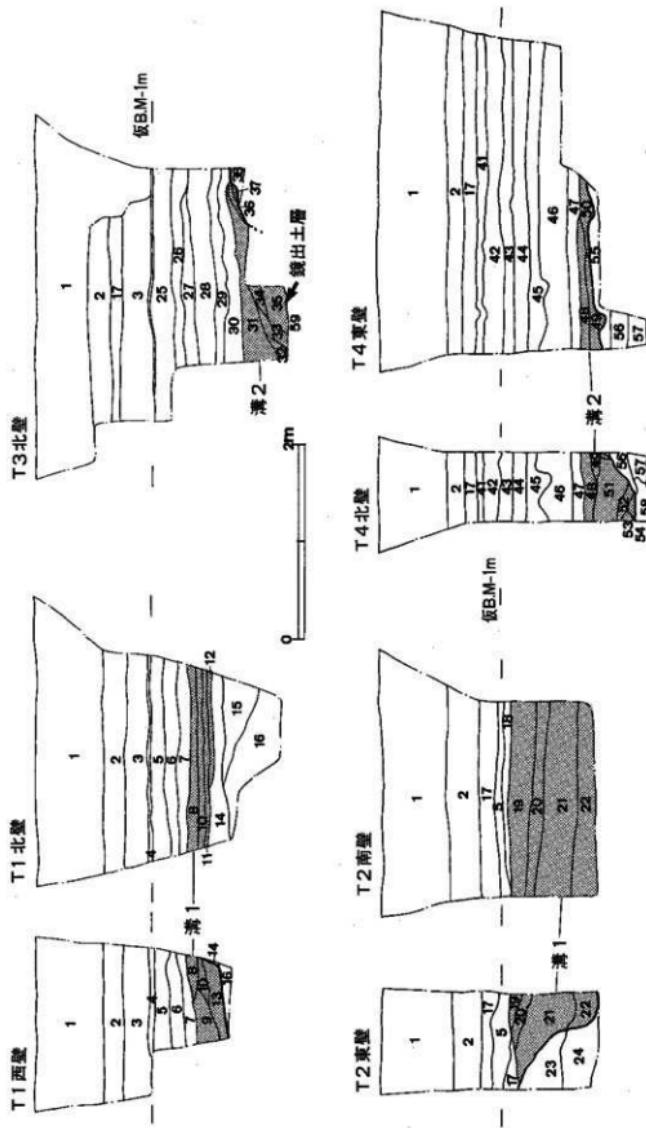
#### a. 造構

##### 溝1

T1・2で確認したもので、ほぼ東西に走行し、深さ約0.8mを測る。幅は不明である。堆積土は灰白色粘土、黒灰色粘土を主体としており、遺物は出土しなかった。ほとんど粘土を堆積土としており、溝として



第5図 調査区平面図（2次調査）



第6図 調査区土層断面図（2次調査）

### 土層一覧

1. 盛土 (現代)	30. 灰色砂質土	溝2堆積土
2. 耕土 (現代水田)	31. 暗灰褐色粘砂質土	
3. 灰色砂質土	32. 灰褐色粘土	
4. 赤色砂質土	33. 淡灰色砂質土	
5. 灰色粘土	34. 白灰色粘土	
6. 灰色粘土 (粘質)	35. 暗褐色粘土 (鏡出土層)	
7. 暗灰色粘土	36. 淡黑褐色砂質土	
8. 灰色粘土	37. 白灰色砂質土	
9. 暗茶灰色粘土	38. 黑褐色砂質土	
10. 暗灰色粘土	39. 灰色砂	
11. 暗灰色粘土	40. 青灰色砂質土	
12. 灰色粗砂	41. 青灰色粘土	
13. 灰色粘土 (粘質)	42. 灰色土	
14. 灰色砂質土	43. 灰色砂質土	
15. 灰色砂質土 (粘質)	44. 淡灰色砂質土	
16. 灰色砂質土 (粗砂混じり)	45. 灰褐色粘砂質土	
17. 暗灰色砂質土	46. 灰色砂質土	
18. 暗灰色粘土	47. 褐色土	
19. 白灰色粘土	48. 淡暗褐色砂質土	
20. 暗褐色粘質土	49. 暗褐色粘土	
21. 灰白色粘土	50. 暗褐色砂質土 (砂混じり)	溝2堆積土
22. 黑灰色粘土	51. 暗褐色砂質土	
23. 灰色砂質土	52. 暗褐色粘質土 (粘土混じり)	
24. 黑褐色砂質土	53. 褐色粘土	
25. 灰褐色粘砂質土	54. 暗褐色粘質土	
26. 淡灰色砂質土	55. 灰白色砂	
27. 暗灰色粘質土	56. 暗褐色粘土	
28. 暗灰色粘砂質土	57. 白灰色砂質土	
29. 暗灰色土	58. 黑褐色粘土	
	59. 白色砂	

は滲水の顯著な状態であったことを示している。

#### 溝2

T 3・4で確認し、南北に走行するもので、深さ約0.5mを測る。堆積土は暗褐色系砂質土、暗褐色系粘土を主体としており、土師器、瓦器、瓦質土器、青磁等土器の他、和鏡が出土した。和鏡は溝2の最下層の暗褐色粘土層に含まれ、溝底には水平に鏡背面を上にした状態で出土した。溝2の時期については、室町時代前半頃と考えられる。

#### b. 出土遺物

造構及び遺物包含層から土師器(皿、羽釜)、須恵器(甕、鉢)、瓦器(椀)、瓦質土器(羽釜)、青磁等の破片の他、和鏡を含め、中世の遺物が収納箱約1箱分出土した。土器はほとん

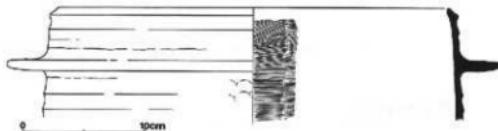
どが細片であり、今回は和鏡と、同一層から出土した瓦質土器を記すこととする。

#### 瓦質土器（第7図）

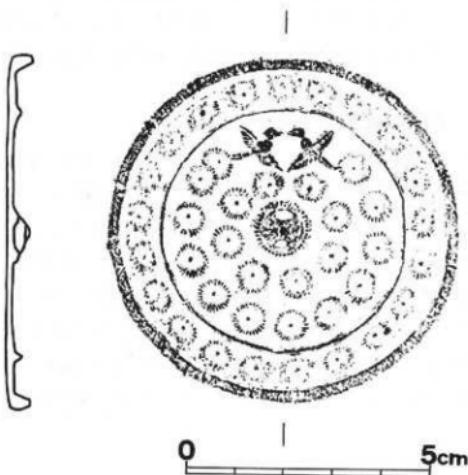
羽釜の口縁部で、復元径32.0cm、残高9cmを測る。外面はナテを施し、内面は横方向のハケ（11条/cm）を施す。鈸部と体部の境に接痕が認められる。

#### 和鏡（第8図）

直径7.2cm、縁厚0.45cm、重さ80.9gを測る円形の銅鏡である。ほとんど鏽がみられないにぶい赤褐色を呈し、極めて遺存状態が良好である。鏡の縁の種類は直角式中縁で、鏡背面の文様は、一条の圈線で区画された外区に21個の菊花が巡り、内区に菊花が鉢を中心に同心円状に12個、8個と巡り、上部に嘴が接するように向かい合う2羽の雀がある。鉢は円錐形で、鉢座は花文である。外区の菊花は磨滅が著しい。一般に菊花散双雀鏡と呼ばれ、鎌倉末～室町初めのものと考えられる。



第7図 出土土器実測図



第8図 出土鏡拓影及び断面図

#### c.まとめ

今回の調査は部分的な調査であり、遺構としては室町時代の東西方向の溝と南北方向の溝を確認できたが、その周辺の状況については明確にできなかった。灰色砂質土の明確な面が存在することと溝の遺物の出土状況から周辺には居住域が展開するものと考えられる。今回の調査で特筆すべきことは溝から和鏡が出土したことであろう。溝、川、池、湖等からの和鏡の出土例は各地で類例があり、いわゆる水中投入鏡と呼ばれるものである。本市では五反島遺跡で河道の落ち際から唐鏡の可能性が高い瑞花鳳凰麒麟狹鏡文鏡の出土例があるが、蔵人遺跡では初めての出土である。今回出土した鏡は水中投入鏡とみられ、当地の溝で室町時代に何らかの祭祀が行われた可能性がある。具体的な祭祀の実態とその周辺の状況については今後の調査の進展に期待したい。

### 3. 蔵人遺跡 3次調査の成果（豊津町931-3）

#### 1. 調査の経過

今回の試掘調査は、埋蔵文化財の確認を目的として平成8年3月19・21日に実施したものである。調査区は中央部にT1～3（調査面積約30m<sup>2</sup>）を設定し、順次機械掘削、人力掘削を行った。その結果、T3で井戸を2基検出し、T1・2で中世の遺物包含層を確認した。これらの写真撮影・図面作成等の記録作成後、埋め戻しを行い調査を終了した。

#### 2. 調査の成果

トレンチ内の土層序は、I層 盛土（現代）、II層 灰色砂質土、III層 暗茶褐色砂質土、IV層 褐色砂、V層 灰色砂礫（井戸1・2等遺構のベース層）、VI層 暗灰色粘質土（中世遺物包含層）、VII層 灰白色砂質土である。T1・2ではVI層の遺物包含層から少量の土器（鎌倉時代）が出土し、T3のV層では井戸1・2を検出した。

井戸1は径約1.6mの円形の掘り方に、桶を使って井戸枠としたもので、現状では2段分確認できた。上段は南側に一部が遺存するのみで、高さ約0.3mを測る。下段はほぼ全体が残ると思われ、径約0.45mを測る。桶を取り巻くように瓦質土器（羽釜）が出土したが、枠材として使われたかどうかはわからない。井戸掘形内の堆積層は暗灰色砂質土を主体とする。出土遺

物は前述の羽釜以外顯著なものには認められなかった。

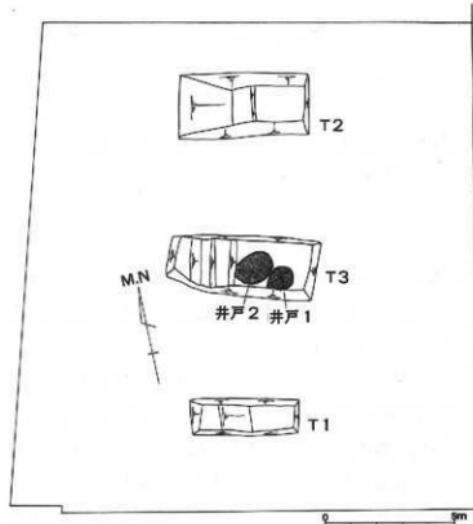
井戸2は現状で1.4×1.1mの楕円形を呈し、黒灰色砂質土を堆積層とするが、未掘のため詳細は不明である。

出土遺物は遺構、遺物包含層から土師器（皿）、瓦器（碗）、須恵器（鉢）、瓦質土器（羽釜）等が出土したが、ほとんどが細片である。鎌倉～室町時代に属する。

#### 3. まとめ

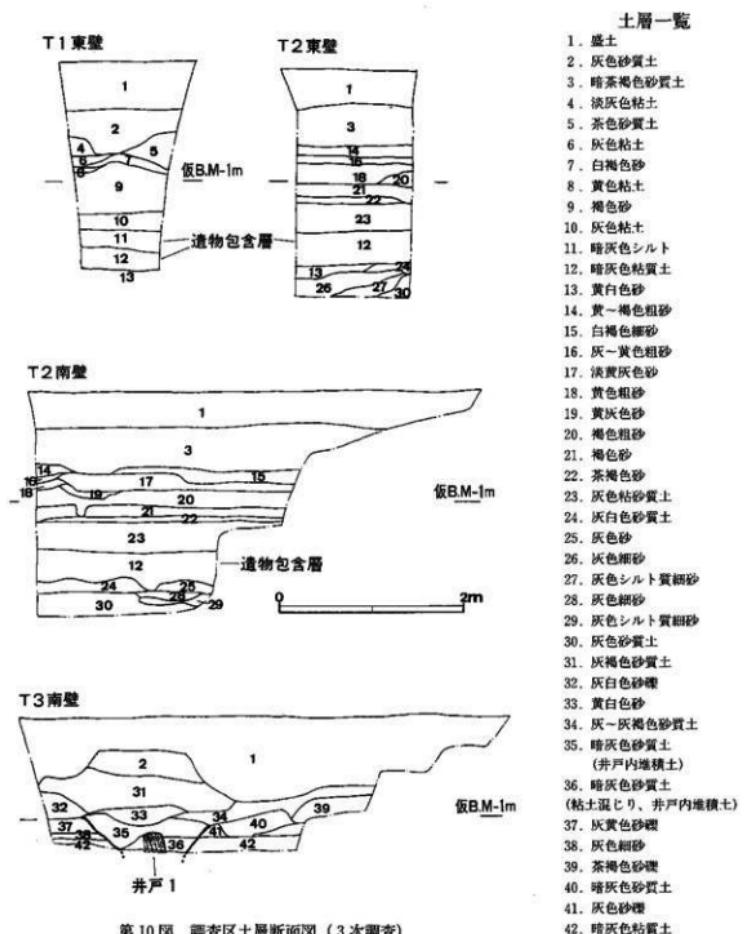
今回の調査では、主な遺構としては中世の井戸を検出した。

井戸は蔵人遺跡では多くの検出



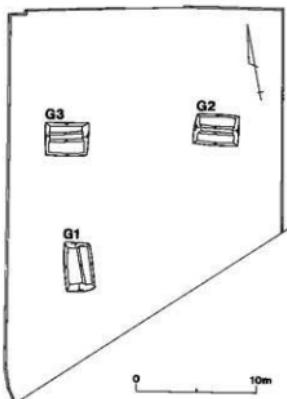
第9図 調査区平面図（3次調査）

例があり、全体的には遺跡の南半部からの検出が多い。第1・2・6・17次では井戸と共に建物跡も検出されており、井戸単独では展開しないものと思われる。したがって、今回検出した井戸も単独では形成されず、建物に伴うものと考えられる。井戸の時期は、出土遺物から鎌倉時代末から室町時代に属するものと考えられる。

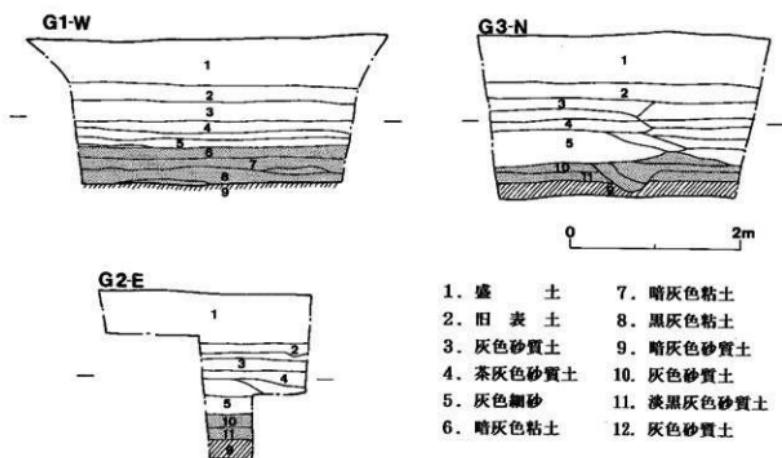


#### 4. 蔵人遺跡 4次調査の成果（豊津町608-1、609-1）

調査は平成8年3月26日及び27日に調査区を3か所（G1～G3 計26m<sup>2</sup>）設定して実施した。調査区の土層序は盛土層及び、旧表土層以下砂質土層の堆積が続き、細砂層の下層、現地表下1.3～1.5mで中世（15世紀代）の遺物を出土する包含層を確認した。遺物包含層は、以下20～40cm堆積し、まとまって遺物が出土する。そして、全調査区においてこの包含層の下層の地表下1.7m前後で安定した堆積を示す暗灰色砂質土層を、その下層で灰色砂質土を確認した。それぞれの堆積層上面では明確な造構は調査面積の関係から確認されなかたが、遺物の出土状況等から中世の造構面と判断される。また、G1、G3では現地表下1.4mで暗灰色粘土層をベースとして、南北方向の畦畔及びそれに取り付く東西方向の畦畔が検出された。



第11図 調査区平面図（4次調査）



第12図 調査区土層断面図（4次調査）

## 第3章 垂水遺跡の発掘調査

### 1. 位置と環境

調査地点は吹田市垂水町2丁目609-1で、千里丘陵の丘陵端から南に200m程の沖積平野上に位置する。

垂水遺跡の立地する千里丘陵は市域の北半部を占め、東西約10km、南北約8kmの規模で、吹田市北部から豊中市東部、そして箕面市、茨木市の一部まで広がる。第三期鮮新世末から第四期更新世前半に古大阪湖・古大阪湾に堆積した大阪層群がその後の地殻変動によって隆起したものである。この隆起は西側から突き上げるような形で起こったために、概して西側が高く、東側が低い傾向を示し、市域では標高約50~80mのなだらかな丘陵となっている。丘陵は砂礫と粘土層で形成されているために堆積土は未凝固で非常に脆く、小河川の浸食が進行し、開析谷や丘陵が複雑に入り込んでいる。

市域の東部から南部一帯を占める沖積低地は大阪平野の一部で、市域一帯は北摂平野に属する。沖積低地の形成過程を辿ると約2万年前の最終氷期後の温暖化に伴う海平面の上昇に伴い、海成層が形成され、このように堆積した地層の上に淀川・神崎川や安威川の土砂が堆積して、市域の沖積低地が形成された。沖積層の厚さについては淀川付近で最大30mに達する。大部分



第13図 垂水遺跡調査地点位置図 (S=1:5000)

が粘土、シルト、砂などの細粒物質で形成されるが、千里丘陵縁辺部では、一部に砂礫を含む。

垂水遺跡は垂水町1丁目から円山町にかけて所在し、標高25~50mの丘陵部上及び丘陵南に展開する標高4~10mの沖積平野上に立地している。昭和48年~51年にかけて、関西大学と吹田市によって丘陵上の発掘調査が実施され、旧石器時代、弥生時代、室町時代の遺構・遺物が確認された。特に弥生時代では竪穴式住居、掘立柱建物、土坑等が検出されており、前期新段階から中期末の急激な増加を経て、後期畿内第V様式までその盛期が認められ、弥生時代集落を考える上で多くの問題を提起している。一方、昭和55~56年にかけて垂水神社東方の丘陵裾部分において発掘調査が実施されたのを初めとし、以後、丘陵裾から沖積平野にかけての発掘調査が増加しており、中期を中心とする弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が現地表下2m近くの深い地点で確認されている。特に弥生時代の遺物の状況が良好なことから当該期の遺構が丘陵下に展開している可能性が高い。中世では当地一帯の条里地割の方位に合致する溝が検出されているが、耕作地に関連するものと考えられ、丘陵近くまで耕作地として利用されていたものと考えられる。

周辺の遺跡についてみると、旧石器時代では垂水遺跡と吉志部遺跡が確認されており、ナイフ形石器等が出土しており、縄文時代では垂水遺跡東方の高浜遺跡で中期の、豊鳴郡条里遺跡で後期の土器が確認されているが、遺跡の実態は不明な点が多い。

弥生時代には沖積低地上で、中期の都呂須遺跡、後期の藏人遺跡、垂水南遺跡、五反島遺跡等が確認されている。これらの遺跡では明確な遺構は確認されておらず、集落の実態は明らかではないが、西摂地域と三島地域の中間地域として一つの遺跡群を形成している。また、後期に垂水遺跡南方の平野部に出現する藏人遺跡と垂水南遺跡は古墳時代前期まで継続し、垂水遺跡との関連が指摘される。

垂水南遺跡は通算53次にわたる発掘調査によって古墳時代前期を中心に遺構・遺物が確認されている。特に遺物の中で、各地からの搬入土器が多数確認されており、広範な交流が伺われる資料である。また、垂水遺跡西方の藏人遺跡、南方の五反島遺跡でも古墳時代前期を中心とする遺構・遺物が確認されており、遺跡間の関連が注目される。

古墳については、前期古墳は垂水西原古墳が知られるのみであり、中期古墳は市域においては確認されておらず、5世紀代に垂水南遺跡などの集落遺跡が盛行するとの対照的である。後期に入ると周辺地域と同様、古墳数は増加するが、市域では出口古墳、吉志部古墳、感神宮所在古墳をはじめ、數カ所で陶棺の出土が確認されているが、群集墳のようなまとまりは特に認められず、千里丘陵縁辺を中心に尾根上に散在する。

一方、千里丘陵一帯は古墳時代後期には須恵器生産の大規模な操業が行われており、その後、聖武朝難波宮の造宮瓦窯である七尾瓦窯、平安宮初期の造宮瓦窯である吉志部瓦窯の操業と窯業地としての歴史が続く。

平安時代初頭の三国川の開削以降、一帯の河川交通等における重要性が高まり、権勢門家や有力寺院領の荘園が成立しているが、垂水南遺跡で「垂庄」「中庄」銘の墨書き土器が出土して

おり、文献史料にみられる東寺領垂水荘との密接な関連が指摘される。中世においても、周辺地では蔵人遺跡、都呂須遺跡等で中世集落に関連する遺構、遺物が検出されている。

## 2. 調査の経過

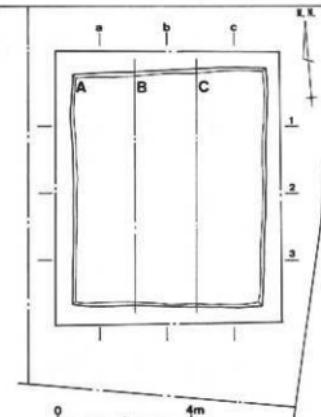
当地点は從来は遺跡の範囲外であったが、垂水遺跡に近接し、遺構等の展開する可能性もあることから、事業者と協議の上、試掘調査を実施した。調査の結果、現地表下2.0mから2.5mの地点で遺構・遺物を確認したことから、文化庁長官に対して平成8年2月16日付で法57条5の発見届を提出し、垂水遺跡の範囲の拡大を行った。発見届の提出後、協議によって建築予定部分全域の面積40m<sup>2</sup>の範囲について発掘調査を実施することとし、平成8年3月14日から調査を開始した。調査は現地表下2.0mまでは近時の盛土層及び堆積層であることから重機で掘削し、以下を人手により調査を実施した。調査の実施にあたっては調査地の排土等の問題から調査区を3分割（西からA～C区）して東側のC区から順次調査を実施した。調査の結果、中世の2時期の遺構面を確認し、各々の遺構面上で溝、土坑、杭等を検出し、写真撮影、図面作成等の記録作成後、3月19日に現地における調査を終了した。

## 3. 調査の成果

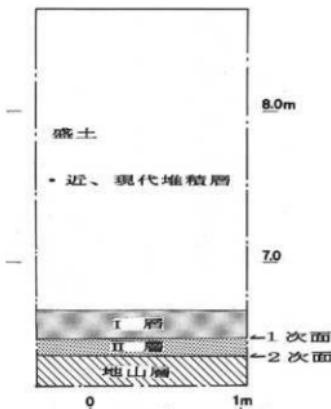
### （1）土層序

現在の地表面は標高8.7mを前後し、地表下2.0mまでは近時の堆積層であるが、砂層を中心とした堆積層であり、近接地を流れる天井川である糸田川の氾濫による近時までの地盤の上昇を示すものである。

現地表下、2.0mで暗灰褐色砂質土（3）の堆積を確認する（I層）が、層中から15世紀後半～16世紀前半の土師器皿等が出土する包含層



第14図 調査区平面図

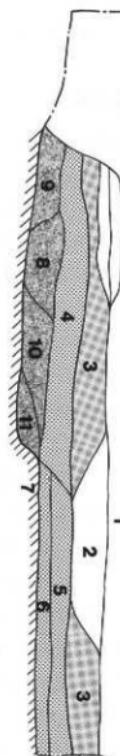


第15図 土層模式図

調查区北壁

-7.0m

捲石土

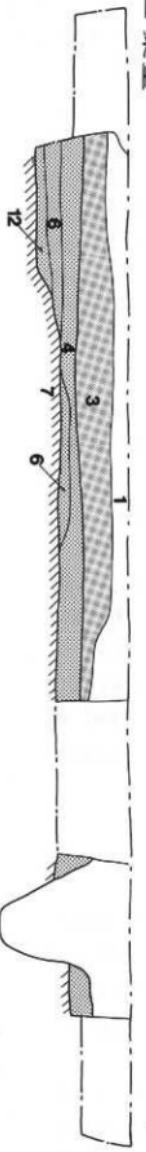


I 土

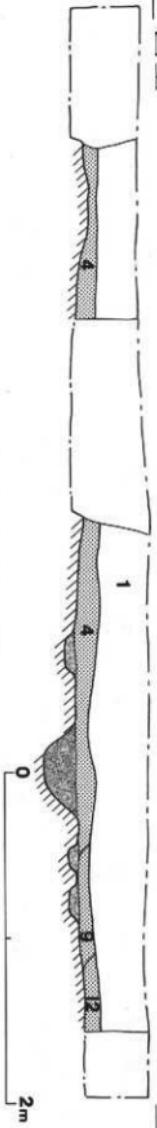
II 土

造積堆積土

東壁



西壁



第16図 調査区土層断面図

である。I層は層厚約20cmであり、その下層で暗灰色砂質土（4）を中心に、灰色砂質土（5）、灰褐色粗砂（6）、灰色粗砂（7）、暗灰色細砂（8）を確認する（II層）が、このII層上面、標高6.55～6.65mの地点で杭、土坑、小規模な礎石を有する建物を検出する（1次面）。II層は層厚、平均15～20cmで、層中から土師器皿等が出土するが、I層出土のものと大きな時期差は認められない。その下層で灰色細砂層（7）を確認し（III層）、その上面、標高6.45～6.55mの地点で土坑、溝等の遺構を検出した（2次面）。III層以下は試掘調査時の所見では、含水率の高い細砂、粗砂層が続き、遺構及び遺物の出土は確認されなかたことから、この灰色細砂層を地山と判断した。

## （2）遺構

### a. 1次面

暗灰色砂質土をベース層とし、遺構面は標高6.55～6.65mを前後する。調査区の西半部で建物、杭、土坑、溝等の遺構を検出した。

#### 土坑（SK1）

調査区の中央、やや南側で検出。東側を新しい時期に掘り込まれているために、全体の規模、形態は不明であるが、現存する部分で南北50cm、東西20cm、深さ10cmである。堆積土は暗灰褐色砂質土、一層であるが、遺物は出土していない。

#### 杭（K1～K4）

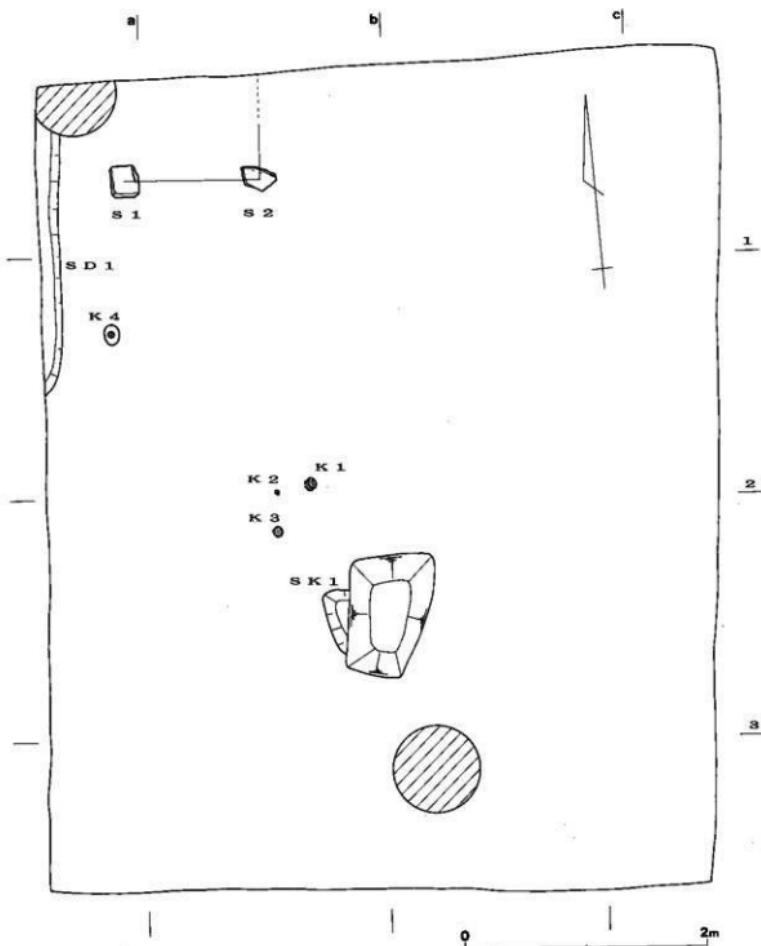
土坑の北側で3基（K1、2、3）の、そして調査区北西端で1基（K4）の杭を検出した。K1は径10cmで地上部分で10cm、地下部分で15cmが遺存しており、やや北東側に傾く。K2は径4cm、K3は径10cmで地上部分で5cm、地下部分で15cmが遺存しており、ともに垂直に打ち込まれている。K1～3は掘方は認められず、直接打ち込まれたものである。位置的にはK1、K2が東西方向に、K2、K3が南北方向にはば直線状に並んでいる。K4は径8cmで、他の3基とは異なり径14cmの掘方が認められる。

#### 溝（SD1）

調査区の北西端で検出したが、東側の肩を確認したのみで、溝の西側の肩及び北側、南側の延長部分は調査区外である。検出部分では幅20cm、深さ9～11cmで、溝内は暗灰色細砂、灰色粗砂の堆積が認められるが、遺物は出土していない。南側は調査区の西側に伸びているが、やや蛇行しながらも、ほぼ南北方向に走行するものと考えられる。

#### 建物

調査区の北西端近くで、東西方向に並ぶ礎石を2基（S1、S2）確認した。S2は平面は



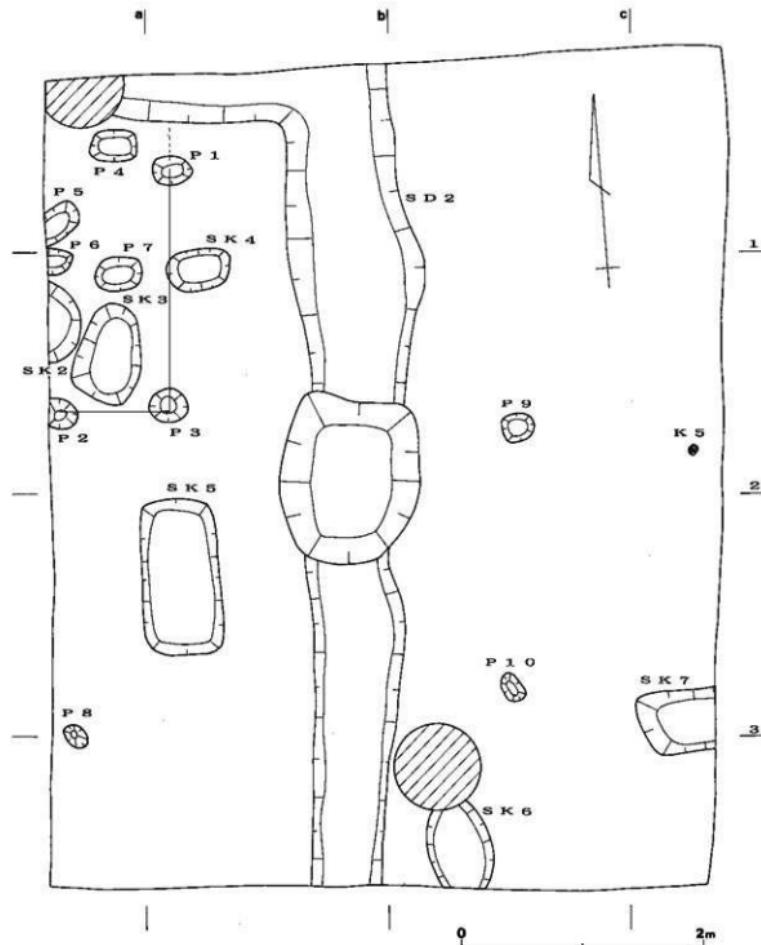
第17図 1次面平面図

台形に近く、S1はほぼ方形で、一辺15cm~30cm、厚さ9cmである。この礎石から想定される建物については、南北の規模は調査区外に伸びることから不明であり、東西の規模については、その関係については明らかでないが、すぐ西側に溝が走行することから、S2が建物の西南端と考えられ、東側については、礎石が失われている可能性もあるが、検出状況からはS1が東南端と考えられることから、南北方向に主軸をとる梁間1間の小規模な建物と判断され

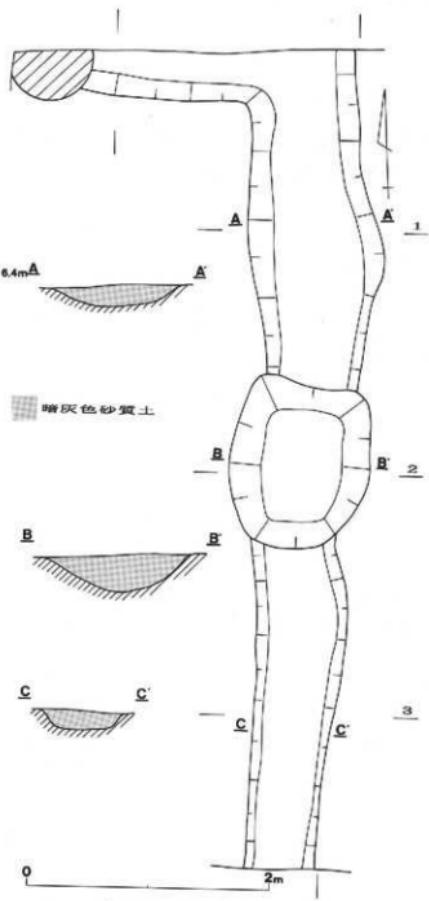
る。小規模な建物ではあるが、当地の地盤が砂質できわめて軟弱なことから、礎石を使用したものかと考えられる。

#### b. 2次面

灰色細砂層をベース層とし、造構面は標高6.45～6.55mを前後する。調査区は中央で南北方向の溝と全域で土坑7基、ピット10基を、中央東端で杭1基を検出した。



第18図 2次面平面図



第19図 SD 2平面図・断面図

堆積土はいずれも暗灰色砂質土、一層であり、遺物は出土していない。

S K 5は調査区の南西部に位置し、平面長方形で東西60cm、南北130cm、深さ20cmで、堆積土は暗灰色砂質土、一層であり、遺物は出土していない。S K 5は溝と主軸方向を同一にすることから溝との関連が考えられるものである。S K 6、S K 7は溝の東側、調査区の東南端近くで検出された。共に全体を調査できなかったが、S K 7は平面長方形で南北50cm、東西60cm以上、深さ18cmで、S K 6は平面楕円形に近く、長径65cm以上、短径55cm、深さ12cmで、共に堆積土は暗灰色砂質土、一層であり、遺物は出土していない。

### 溝 (SD 2)

調査区のはば中央を南北に走行し、調査区北端で西側の肩はほぼ直角に西に屈曲し、調査区外に伸びていくが、溝全体が西に屈曲するのか、南北方向の溝から西に分岐しているのかは明らかではない。検出部分では、南北6.6m以上、上端幅50cm~90cm、深さ7.5cm~14.5cmで、底面はほぼ水平である。溝の検出部分のはば中央で東西1.2m、南北1.4mの規模で、深さ30cm掘り込まれている。堆積土は溝部分と明確な差は認められず、溝と重複関係にあるのではなく、同様に機能していたものと考えられる。堆積土は暗灰色砂質土であるが、西に屈曲する部分は細砂及び砂質土の堆積が認められ、土器皿、瓦質土釜が出土している。

### 土坑 (SK 2~SK 7)

溝の西側、調査区の北西部に3基が集中して検出された。SK 2・SK 3は平面楕円形に近く、SK 2は調査区外に広がるが、SK 3は長径80cm、短径50cm、深さ20cmで、堆積土は共に暗灰色砂質土で、遺物は出土していない。SK 4は平面は長方形に近く、一边30×50cm、深さ7.5cmであり、

### ピット（P 1～P 10）

調査区北西部に7基が集中して検出された（P 1～P 7）が、P 1～P 3は平面ほぼ円形で径25～30cm、深さ6～11cmである。堆積土は同様に暗灰色砂質土、一層であり、遺物は出土していない。この3基はほぼ同一規模で、直線状に並ぶことから、明確に柱痕等の痕跡は認められないが、柱穴の可能性があり、南北方向に主軸をとる建物跡の可能性がある。その場合、南北1.95m以上、東西0.9m以上となる。P 4～P 7は平面長方形に近く、調査区外に広がるものもあるが、一辺20cm～40cm、深さ5.5～6.5cmで、堆積土はいずれも暗灰色砂質土、一層であり、遺物は出土していない。

P 8は調査区西南端近くで検出され、径15～20cm、深さ16cmで、堆積層は、暗灰色砂質土、一層で、遺物は出土していない。P 9、P 10は溝の東側で検出され、径15～20cm、深さ10～14.5cmで、溝に平行して南北に並ぶ。共に堆積土は暗灰色砂質土、一層で遺物は出土していない。

### 杭（K 5）

調査区の中央、東端に位置し、径5cmで、掘方は認められず、打ち込まれたものであるが、南にやや傾いている。

### （3）遺物

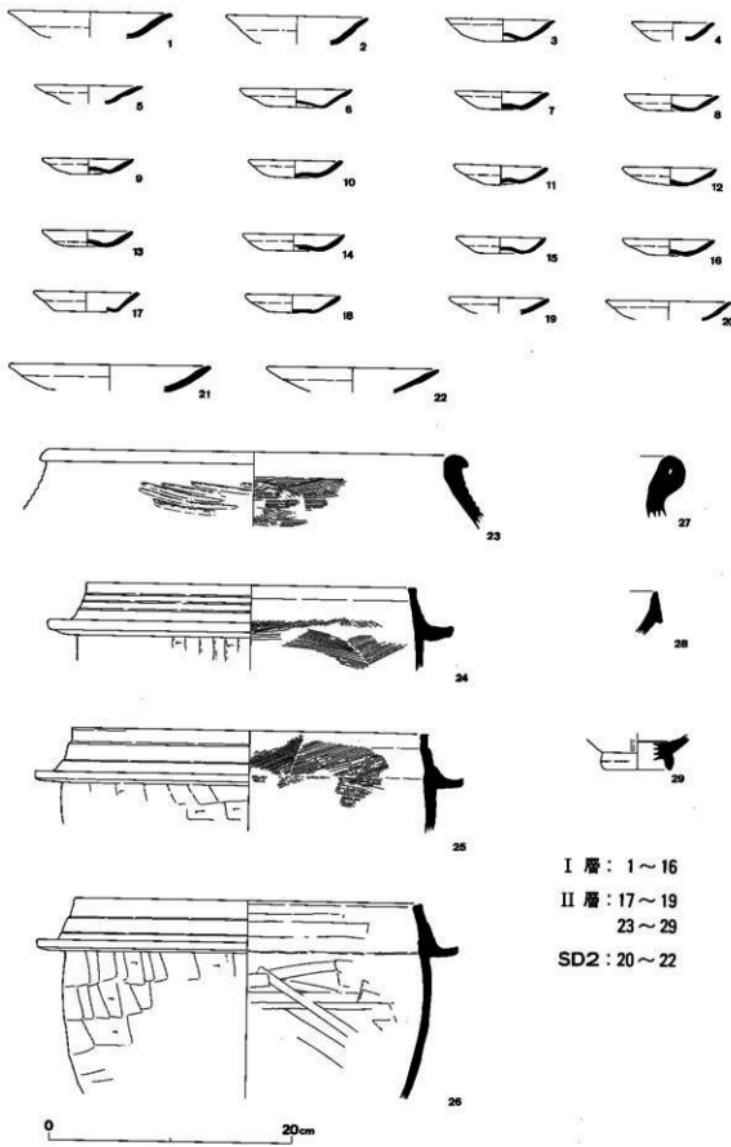
今回の調査の出土遺物はコンテナ1箱分で、土師器皿、瓦質土釜・甕、青磁碗等が認められるが、遺構からの出土は2次面の溝S D 2からのみで、大半が包含層出土のものである。以下、I層、II層及びS D 2出土の遺物に分けて記すが、出土遺物の大半を占める土師器皿は大きさからは、10cm以下の小皿、10～13cmの中皿、13cm以上の大皿の3種類が、色調からは3種類が認められる。底部はほぼ平らか、弱く突出させており、体部から口縁部にかけては外方にほぼ直線的、あるいは弱く外反しながら伸びるもの（A）、内輪気味に伸びるもの（B）の2種類が認められる。調整はいずれも体部半ばないしは下方から2/3にかけてはユビオサエ、上方をヨコナデを施す。胎土は精良なものが多い。

#### a. I層出土遺物

調査地各所から土師器皿、瓦質土釜、備前焼甕、捕鉢、青磁等が出土しており、土師器皿は完形に近いものも認められるが、特に遺物が集中する地点は認められない。土師器皿以外の土器は細片のものが多く図示できるものがないことから、土師器皿について概略を記す。

#### 土師器皿（1～16）

（1）・（2）は皿Aで、（1）は口径13.6cm、器高2.1cmの大皿、（2）は口径11.6cm、器高2.3cmの中皿であり、色調は共に淡黄色～灰白色を呈する。器壁は5.0mmと厚い。



第 20 図 出土遺物実測図

小皿は色調からは褐色、淡黄色～灰白色、灰色の3種類があり、量的には淡黄色系のものが大半を占める。(3)・(4)は褐色を呈す皿Bで、(3)は口径9.0cm、器高1.9cm、(4)は口径6.8cm、器高1.5cmである。

(5)～(9)は皿Aで、淡黄色～灰白色を呈し、口径7.5～9.2cm、器高は1.4～1.5cmである。(5)・(6)は口径が9cm前後で他よりやや大きく、体部の押圧痕も顯著である。(10)～(14)は皿Bで、淡黄色～灰白色を呈し、口径7.5～8.3cm、器高1.3～2.0cmであるが、大半が口径7.8cm、器高1.4～1.5cmのものである。(15)・(16)は皿Bで灰色を呈す。(15)は口径7.5cm、器高1.4cm、(16)は口径7.6cm、器高1.8cmであり、形態、成形、調整は淡黄色系のものと同様であるが、堅敏に焼成されている。但し、この皿2点については形態、調整、胎土等は淡黄色系のものと全く同一である。なお、(5)及び(8)は内面に煤の付着が認められ、灯明皿として使用されたものと考えられる。

#### b. Ⅱ層出土遺物

土師器皿、土師質土釜、瓦質土釜・甕、備前焼甕、青磁が出土してゐるが大半が細片である。他に瓦器（和泉型IV期か）等、他より遡る時期の資料も認められるが、微量の細片で、器表面も摩滅していることから混入品と考えられる。

#### 土師器皿（17～19）

図示できたのは小皿3点であるが、淡黄色系のものであり、(17)・(18)は皿A、(19)は皿Bである。(17)は口径8.6cm、器高1.6cm、(18)は口径8.3cm、器高1.4cm、(19)は口径7.8cm、器高1.5cmである。(19)は底部の突出はみられず、平らなものである。

#### 瓦質甕（23）

口径33.0cmで、体部に、明確な頸部を形成せずに口縁部がつく形態のもので、口縁端部はやや尖り気味である。体部外面は横方向の粗いタタキを、内面はハケ調整を施す。

#### 土釜（24～26）

口径27cm～30.9cmで、瓦質（24・25）と土師質（26）のものがある。形態的にはほぼ同じで、口縁部はやや内傾気味に立上がり、外面には強いナテによる段が認められる。内側は内側気味に水平に伸びる。いずれも、外面は横方向のヘラケズリを施し、内面は（24）は頸部までハケ調整、口縁部はナテ調整を、（25）は口縁部までハケ調整を施すが、頸部と口縁部ではハケの単位が異なる。（26）は板ナテ状の調整を体部から口縁部にかけて施す。（24）・（25）の胎土は1mm以下の微砂粒を含む、精良なものであり、甕の胎土とよく似る。（26）は土師質ではあるが、非常に堅敏に焼成されており、胎土は3mm大の砂粒を多く含み、やや粗い胎土である。

### 備前焼 (27・28)

甕 (27) 及び擂鉢 (28) の口縁端部の破片であり、間壁忠彦氏の編年によるIV期後半の資料である。

### 青磁碗 (29)

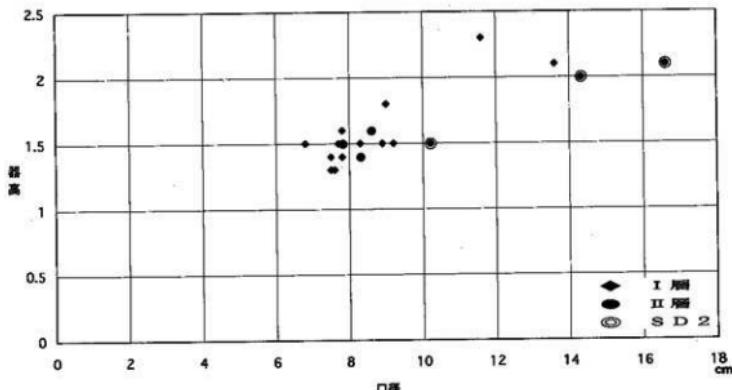
ヘラ先による細線蓮弁紋を配する碗の底部、高台部の細片であり、疊付を越えて高台内面途中まで釉がかかり、上田秀夫氏の分類によるB-IV類に相当するものと思われる。

#### c. 溝出土遺物

今回の調査で造構から遺物の出土の確認されたのは、2次面で確認された溝、SD 2からのみであった。出土遺物は土師器皿及び瓦質土釜であるが、土釜は細片のみであることから、土師器皿について説明する。

土師器皿は皿Bで、小皿 (20) と大皿 (21)・(22) があり、(20) は口径10.2cm、(21) は口径16.6cm、(22) は口径14.3cmである。(20)・(22) は淡黄色系であるが、(21) は黒褐色～灰褐色を呈しており、他の皿とは異なる。

以上、調査での出土遺物について、包含層 (I層・II層) 及び造構 (溝) からの出土遺物について記したが、土師器皿についてみると15世紀後半から16世紀前半にかけての資料と考えられ、瓦質土釜・甕、備前焼については15世紀後半の資料と考えられる。土師器皿についてはやや時期幅が認められ、層ごとに明確には分けられず、混在した状況である。この出土状況については、包含層自体が河川の氾濫に伴う堆積層であることによるものと思われる。



第21図 土師器皿寸法分布

#### 4. まとめ

今回の発掘調査は垂水遺跡の最も南に位置する地点であり、調査面積は40m<sup>2</sup>と小規模な調査ではあったが、調査によって2時期の造構面を確認し、垂水遺跡の中世後半期の状況の一端を確認した調査であった。

1次面では礎石、杭、土坑、溝等の造構を検出したが、特に調査区西側に集中して確認された。礎石を使用する建物は調査区の西北部で確認したことから、その規模等は明らかではないが、西側に位置する南北方向の溝との位置関係からは梁間1間（桁行1間以上）の小規模な建物の可能性が高い。

2次面では、調査区のはば中央を南北に走行する溝（SD2）、柱穴と考えられるピット、土坑を検出したが、1次面同様調査区西側、中央の南北方向の溝より西側に集中している。また、柱穴と考えられるピットから復元される建物も規模は明らかではないが、西北部に位置している。

調査区の造構の検出状況からは、1次面と2次面は同じ状況を示している。調査区の東半部と西半部では造構の検出状況が大きく異なり、調査区の東半部は造構が少なく、西半部で大半の造構が検出されており、建物の位置も西北部に位置している。特に2次面で確認された南北方向の溝が調査地東西の区画に関わっているようであり、1次面についても、明確な区画の施設は認められないが、2次面の溝の位置が意識されているようである。このことから、西半部（特に西北部）は建物や土坑等が検出されていることから、屋敷地の一画であることが考えられよう。

造構の時期については明確な時期の断定はできなかったが、遺物の出土状況から15世紀後半～16世紀前半にかけての造構群と考えられ、2次面の造構群が糸田川の氾濫によって覆われた後、比較的短期間の内に1次面の造構が形成されたものと考えられる。これは、西方の藏人遺跡でも認められる状況であり、絶え間なく氾濫を繰り返す河川に近接する不安定な沖積低地に形成された集落の宿命であろう。

沖積平野上での垂水遺跡の発掘調査は昭和55年度以降、数次にわたって行われてきたが、当調査地点よりも丘陵裾に近い地点であり、確認された造構・遺物は弥生時代以外では11世紀から13世紀にかけてのものが多く、室町時代の造構の確認は初めてである。一方、昭和48年～51年にかけて実施された丘陵上の調査では、板碑を伴う土壙墓、小祠等の中世墓地に関連する造構を確認しているが、これらは今回の調査で確認した造構等とは同一時期のものであることから、丘陵上の墓地を築いた人々の集落の一端を確認したものと考えられる。

但し、今回の調査は面積的に非常に限られたものであることから、集落の展開及び変遷等はいずれも、今後の調査による課題である。

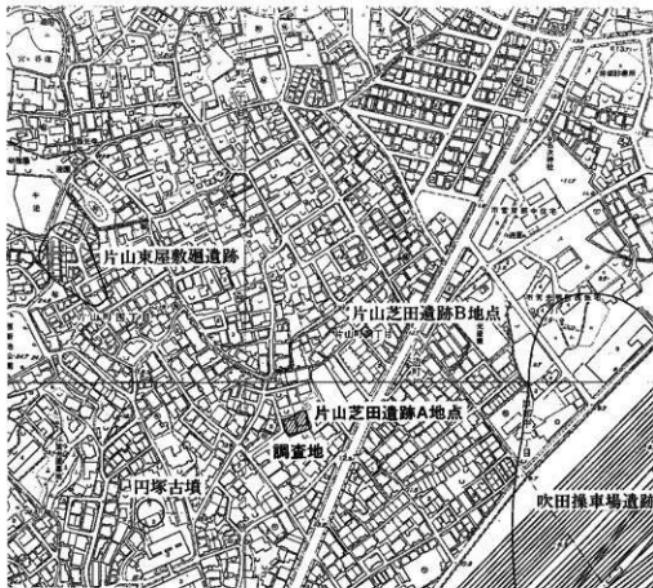
## 第4章 片山芝田遺跡の発掘調査

### 1. 調査の経緯

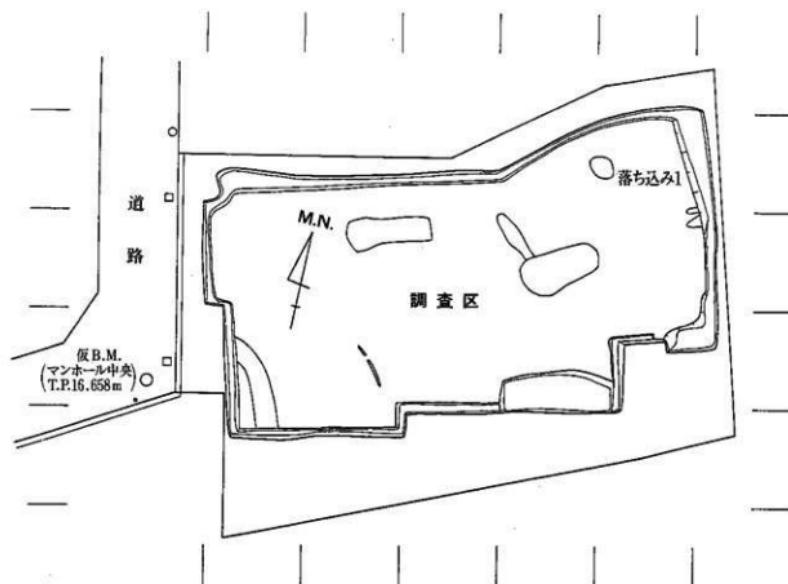
今回の調査は、共同住宅建築工事に伴う事前調査である。吹田市片山町4丁目2374-1他において、平成8年6月4日から7月23日にかけて実施した。調査は、当該工事予定地内に建築予定建物の形状を調査区（面積約449m<sup>2</sup>）として設定し、重機及び人力により注意深く掘削した。掘削終了後、トレンチ内の検出状況については詳細に観察したところ、調査区内より古墳時代及び平安時代と考えられる造構面を確認し、掘立柱建物、土坑、溝、小溝群、落ち込み等の遺構を検出した。これらの造構については、写真撮影、土層断面図・平板測量図の作成等の記録作業を行ったのち、調査を終了した。

### 2. 基本土層序

調査地の現在の地表面は標高（T.P.）約16.6mであり、深く擾乱を受けた部分（第1層）を除き、地表面下約28.0cmの厚さの表土層（第2層）以下、淡灰色砂質土層（第10層）、灰色砂質土層（第11層）、淡灰色砂質土層（第12層）、淡灰色砂質土・淡黄褐色粘質土混合層（第13層）



第22図 片山芝田遺跡調査地点位置図 (S=1:5000)



第23図 調査区配置図 ( $S = 1:250$ )

(第13層)、灰色砂質土層(第19層)、黄褐色シルト層(第24層)、明黄褐色粘土層(第25層)、淡茶褐色シルト層(第31層)、灰白色シルト層(第32層)、淡灰色粘土層(第51層)などの土層が、ほぼ水平方向に薄く堆積し、地表面下約12.0~68.0cmで洪積世層とみられる層(第54~64層)に達する状況がみられた。この地山上面が造構面となり、この面より多数の造構及び遺物が発見された他、第4~51層からは多くの遺物が発見された。

なお、調査区内の基本土層序については、次のとおりに大別されるものと考えられる。

#### I層 (第1・2層)

擾乱土層、表土層である。

#### II層 (第10~13・19層)

砂質土を主体とし、薄く水平方向に堆積する層で、各層の厚さは約4.0~20.0cmである。

#### III層 (第24・25層)

黄色粘土等を主体とし、層厚約3.0~7.0cmと薄く、水平方向に堆積する。

#### IV層 (第31・32層)

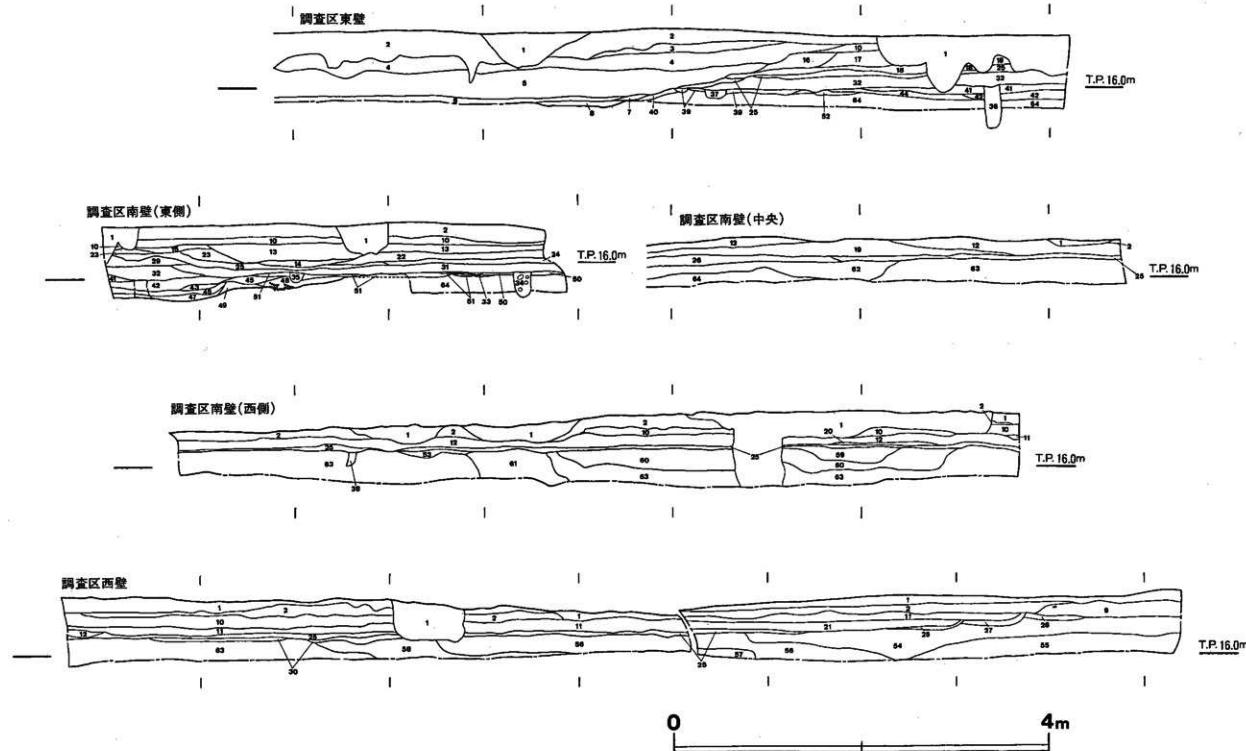
層厚約10.0cmのシルト層で、調査区内では柱穴の密集する東南側の地域に分布する。

#### V層 (第51層)

鉄分による暗茶褐色斑が入る淡灰色粘土層。層厚約2.0~6.0cmと極めて薄く、また調査区

## [土 層 序]

1. 現代樹林土層
2. 黒灰色 土層 (黒灰色地質)
3. 遠近褐色細砂層 (遠くみ内陸土)
4. 黑褐色細砂層 (遠くみ内陸土)
5. 黑色 粗砂層 (遠くみ内陸土)
6. 黑灰色細砂層 (遠くみ内陸土)
7. 黑白色シルト層 (遠くみ内陸土、黒褐色地土混ざる)
8. 黑褐色粘土層 (野原土)
9. 黑白色粘土層 (土塊を含む)
10. 海底沙質土層
11. 黑灰色質土層
12. 黑灰色砂質土層
13. 黑褐色砂質土層・黑褐色粘土質土層
14. 黑灰色質土層 (赤みが強くなる)
15. 黑褐色質土層 (黒褐色地土混入する)
16. 黑灰色シルト層
17. 白色シルト層 (部分の茶色が強まる)
18. 黑灰色細砂層
19. 黑灰色砂質土層
20. 白灰色砂質土層
21. 黑褐色粘質土層 (黒褐色地土混入)
22. 黑褐色粘質土層 (黒褐色地土混入)
23. 黑褐色シルト層
24. 黑褐色粘土層 (黒褐色地土混入)
25. 黑褐色粘土層 (黒褐色地土混入)
26. 白灰色砂質土層
27. 黑褐色粘土層
28. 黑褐色粘土層 (黒褐色地土混入)
29. 黑白色シルト層 (黒褐色地土混入)
30. 黑白色シルト層 (黒褐色地土混入)
31. 黑白色シルト層 (白灰色シルト混ざる)
32. 黑白色粘土層 (黒褐色地土混入)
33. 黑色粘土層
34. 黑灰色粘土層 (ピット内陸土、黒褐色地土層を多く含む)
35. 黑灰色粘土層 (ピット内陸土)
36. 黑灰色粘土層 (ピット内陸土、灰・土塊を多量に含む)
37. 黑灰色粘土層 (ピット内陸土、土塊・灰を含む)
38. 黑褐色土層 (ピット内陸土)
39. 黑灰色シルト層
40. 黑褐色砂質土層 (黒褐色)
41. 黑白色シルト層
42. 黑褐色粘土層 (黒褐色地土層、細めて堅固、灰多く含む)
43. 黑褐色粘土層 (黒褐色地土層)
44. 黑灰色シルト層 (黒褐色地土層)
45. 黑灰色粘土層 (黒褐色地土層)
46. 黑色粘土層 (黒褐色地土層)
47. 黑褐色粘土層 (黒褐色地土層、堅く、黒褐色地土層が強まる、土塊多く含む)
48. 黑褐色粘土層 (黒褐色地土層、堅く、黒褐色地土層が強まる、黒褐色多く含む)
49. 黑褐色粘土層
50. 黑灰色粘土層 (黒褐色地土層が強くなる)
51. 黑灰色粘土層 (黒褐色地土層が強くなる)
52. 黑褐色粘土層
53. 黑色粘土層 (黒褐色)
54. 黑白色粘土層 (黒褐色、赤まじり、上面に黑色マングン鉱を多く含む)
55. 黑灰色粘土層 (黒褐色、堅く、マングン鉱多く含む)
56. 黑色粘土層 (黒褐色)
57. 黑灰色粘土層 (黒褐色)
58. 黑白色砂質土層 (黒褐色)
59. 黑色粘土層 (黒褐色、マングン鉱多く含む)
60. 白褐色粘土層 (黒褐色、マングン鉱多く含む)
61. 黑褐色粘土層 (黒褐色)
62. 黑褐色砂質土層 (黒褐色)
63. 黑褐色粘土層 (黒褐色)
64. 黑褐色粘土層 (黒褐色)



第24図 土層断面図

内ではIV層よりさらに狭い東南隅にのみ分布する。

#### VI層（第54～64層）

粘土・粘質土を主体とする堆積層で、部分的に砂質土もみられた。これらの層はそれが複雑な堆積状況を示していたが、その上面はほぼ水平方向の堆積ながら、西から東にかけて緩やかに下降する傾斜がみられ、この面より掘立柱建物等の柱穴群、溝、落ち込みなど遺構が検出された。遺構面の標高は約15.9～16.2mであり、調査区の北端から西端にかけては標高約16.3～16.4mへと段階的に上昇し、この付近から地形の変化を示している。

### 3. 遺構

今回検出された遺構面は、II層及びVI層2面である。第1次面からは、溝1条（溝1）と落ち込み1か所（落ち込み1）を検出し、第2次面からは、土坑2基（土坑1・2）、溝15条（溝2～16）、落ち込み1か所（落ち込み2）が検出された他、多数のピット（ピット1～108）が検出された。このうち、建物として明確に復元できたのは3棟である。なお、これらの遺構については調査区内の南側及び東側に集中しており北西側の一角については全く検出されなかった。

#### 第1次遺構面

##### 落ち込み1

調査区の最も東端に位置し、N-27.2°-Wの方位を示す。淡灰色砂質土層（第10層）をベースとし、深さ62.0cmを測る。埋土は上層が灰褐色細砂層（第4層）、中層が灰色細砂層（第5層）、下層が淡灰色細砂層（第6層）であり、上層からは須恵器甕・杯等、備前焼擂鉢を、中層からは須恵器甕・杯等、土師器皿、瓦器碗を、下層からは須恵器、土師器皿を出土する。

##### 溝1

落ち込み1の底面に位置し、N-23.5°-Wの方位を示す。幅24.0～34.0cm、深さ1.5～4.8cmを測り、埋土は淡黄色砂質土層（第8層）とする。

#### 第2次遺構面

##### （1）掘立柱建物等

調査区からは多数のピットが検出されたが、大小様々であり平面形状についても隅丸方形・円形・楕円形・不定形などがみられ、一辺の長さ及び直径は10.0～75.0cm、深さは3.5～64.5cmを測る。このうち建物として明確に復元できたのは3棟である。

##### 建物1

他の建物と重複する位置に展開する5間以上×2間の建物であるが、2棟以上の建物が並んで建っていた可能性も考えられる。桁行2.00～2.30m、梁間2.00～2.20mを測り、棟の方位はN-68.4°-Eを示す。柱穴は14基を検出し、円形である。直径は7.0～37.0cmを測り、深

さ3.5～44.0cmを測る。柱穴3・9・17・28・44・46・55・57・60からは、古墳時代の須恵器、平安時代の土師器・黒色土器A類椀などの遺物の出土がみられた。

#### 建物2

建物1と重複する位置に展開する1間×1間の建物で、桁行3.75m、梁間2.50mを測り、棟の方位はN-66.6°-Eを示す。柱穴は4基を検出し、円形である。直径は28.5～32.0cmを測り、深さ26.0～49.0cmを測る。柱穴2・29・42・62からは、古墳時代の須恵器、平安時代の土師器・黒色土器A類椀などの遺物の出土がみられた。

#### 建物3

調査区の南東側に位置する3間以上×2間以上の建物で、桁行2.08～2.20m、梁間1.25mを測り、棟の方位はN-65.4°-Eを示す。柱穴は8基を検出し、隅丸方形或いは円形である。掘方の一辺・直径は12.0～41.0cm、柱痕は直径12.0～14.0cmを測り、深さ17.5～60.0cmを測る。柱穴18・20・26・35・39・41・43・45・46からは、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の土師器・黒色土器A類椀・同B類椀・樟葉型瓦器椀などの遺物の出土がみられた。

#### 柱列1

調査区の南側に位置する3間の柱列で、2.30m間隔で並び、N-74.0°-Eの方位を示す。柱穴は4基を検出し、円形である。直径は21.0～48.0cm、深さ14.0～65.0cmを測り、両端が大きい。柱穴の規模からみて調査区の南側に建物が展開する可能性が考えられる。柱穴91・92・97・101からは古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の粗製土師器などの遺物の出土がみられた。

#### 柵列1

調査区の東側に位置する5間の柱列で、約1.80m間隔で並び、N-62.9°-Eの方位を示す。柱穴は6基を検出し、いずれも円形である。直径は14.5～28.0cm、深さ15.5～27.0cmを測る。柱穴32・47・53・68からは、古墳時代の須恵器、平安時代の土師器・黒色土器A類椀などの遺物の出土がみられた。

### (2) 土坑

#### 土坑1

調査区の北側に位置し、幅8.6×4.9cm、深さ3.5cmを測り、淡灰色細砂層を埋土とする。

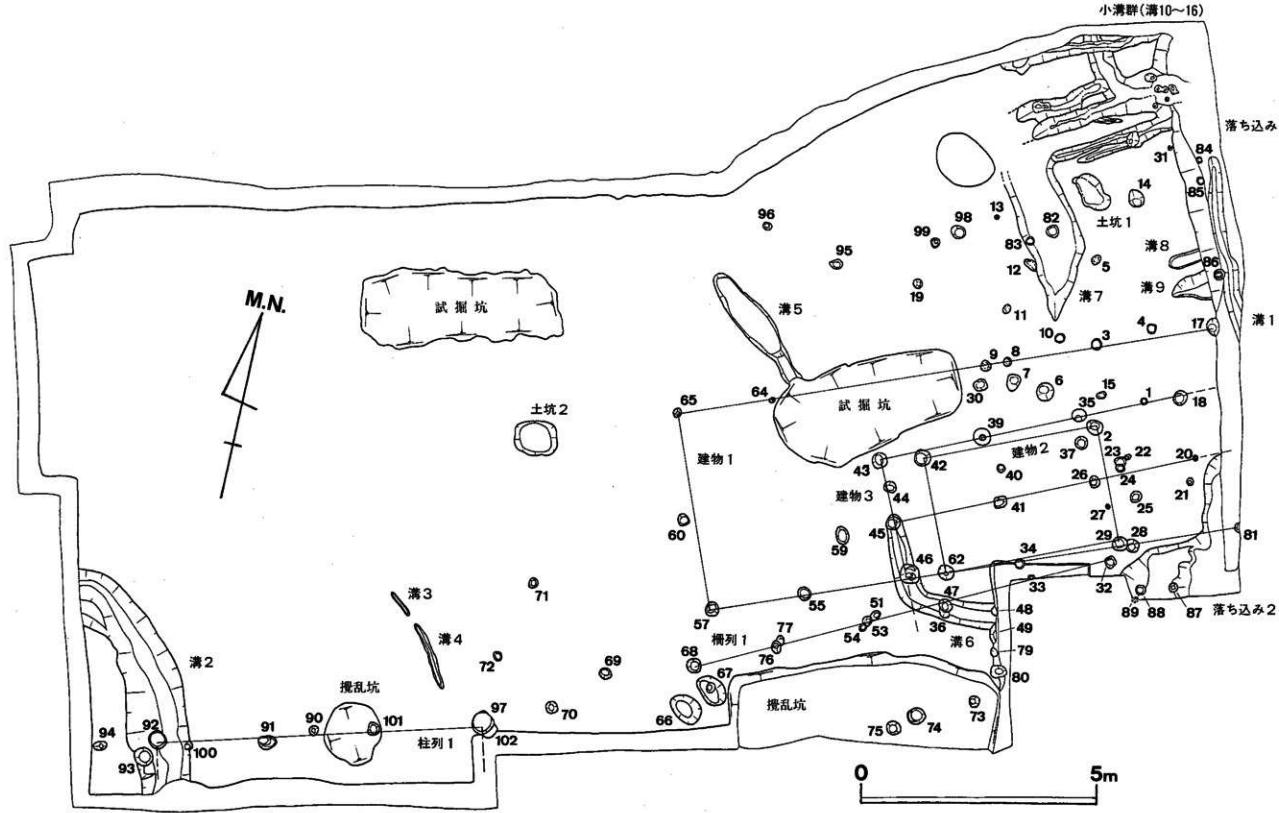
#### 土坑2

調査区の中央に位置し、幅84.0×69.0cm、深さ37.0cmを測り、淡灰色粘質細砂層を埋土とし、須恵器甕・杯・蓋、黒色土器A類椀を出土する。

### (3) 溝

#### 溝2

調査区の最も西端に位置し、N-20.5°-Wの方位を示すが、溝北端で西方へ曲折する。幅



第25図 造構平面図

92.0~129.0 cm、深さ11.8~19.5cmを測り、灰色粘土層を埋土とし、古墳時代の須恵器蓋杯・甕等、土師器を出土する。

#### 溝3・4

調査区の中央南側に位置し、N-34.1°~49.1°-Wの方位を示す。幅は14.8cm及び5.8cm、深さはいずれも10.0cmを測る。埋土は灰色粘土層とし、断面V字状をなす。遺物は平安時代の土師器蓋杯・皿等を出土する。

#### 溝5

建物1の北側に位置し、N-49.0°-Wの方位を示す。幅28.0~66.0m、深さ10.1~34.4cmを測り、埋土は上層を灰色砂層、下層を暗灰褐色粘土層とする。



第26図 落ち込み2検出状況図

#### 溝6

建物3の西側から発し、N-57.4°-Wの方位を示すが、約1.8 mで東へ屈曲し、N-89.2°-Wとなる。幅43.0~55.0cm、深さ7.0~14.2cmを測り、埋土は暗灰褐色粘土層とする。この溝は溝5の延長線上にあり、埋土もほぼ一致することから、同一の溝の可能性を考えられる。

#### 小溝群等(溝7~16)

調査区の最も北端に位置し、N-56.9°~73.9°-E及びN-32.6°~35.6°-Wの方位を示す。幅約20.0~51.0m、深さ約2.2~10.1mを測り、淡灰色細砂層を埋土とする。土師器甕・皿等、青磁碗、瓦器碗、古墳時代の須恵器蓋杯・甕等を出土する。ほぼ同じ規模の溝が数条併走又は直交していることから、いわゆる鋤溝と考えられる。

### (4) 落ち込み

#### 落ち込み2

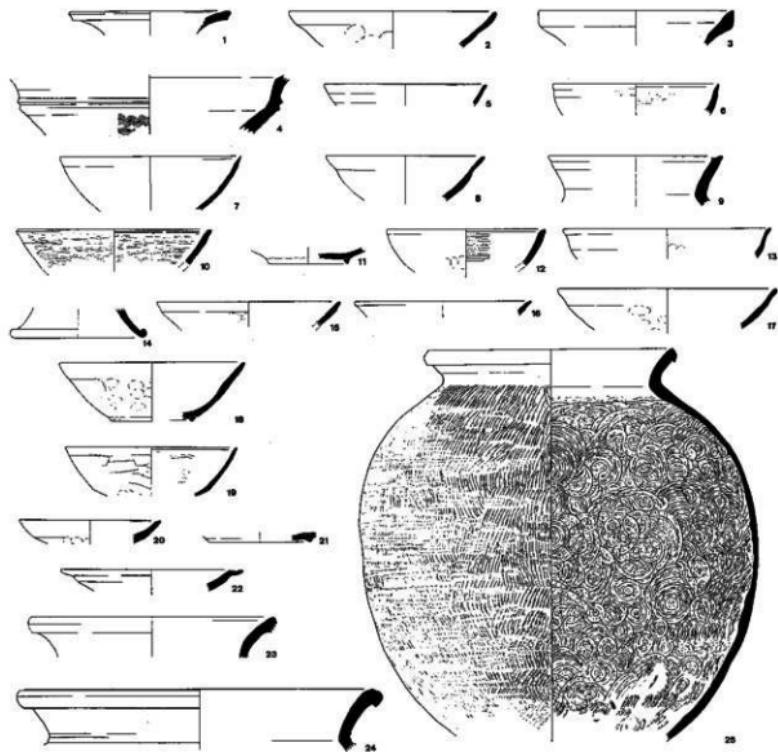
調査区の最も東南端に位置し、深さ24.0cmを測る。埋土は上層が暗茶褐色粘土層、中層が淡灰色粘土層、下層が淡黄色粘土層であり、上・中層からは土師器甕・須恵器甕・杯等を、下層からは土師器甕・須恵器甕・高杯等の古墳時代の遺物を出土する。

## 4. 出土遺物

今回出土した遺物は、須恵器、黒色土器碗、土師器杯・皿を中心に、瓦器碗、備前焼擂鉢、中国製磁器、石製品等があり、遺物収納箱5箱分に相当する。大半が遺構面の上層に展開する包含層からの出土であり、また遺構内出土遺物についても、その殆どが柱穴等からのものであるため、落ち込み2からの出土遺物を除いて、細片が多い。本書においては柱穴・落ち込み等の遺構内出土遺物及び包含層出土遺物について報告する。

#### (1) 土 器

##### a. 第1次遺構面(第27図1~3)



#### 第1次造構面

(1)～(3)は落ち込み1、

#### 第2次造構面

(4)～(5)はピット3、(6)はピット4、

(7)はピット7、(8)はピット17、

(9)はピット30、(10)～(11)はピット39柱窓内、

(12)はピット41、(13)はピット46、

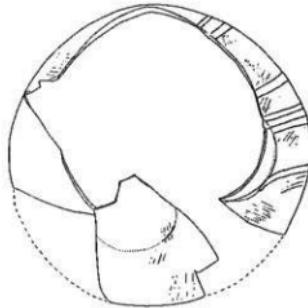
(14)はピット57、(15)はピット62、

(16)はピット69、(17)はピット75、

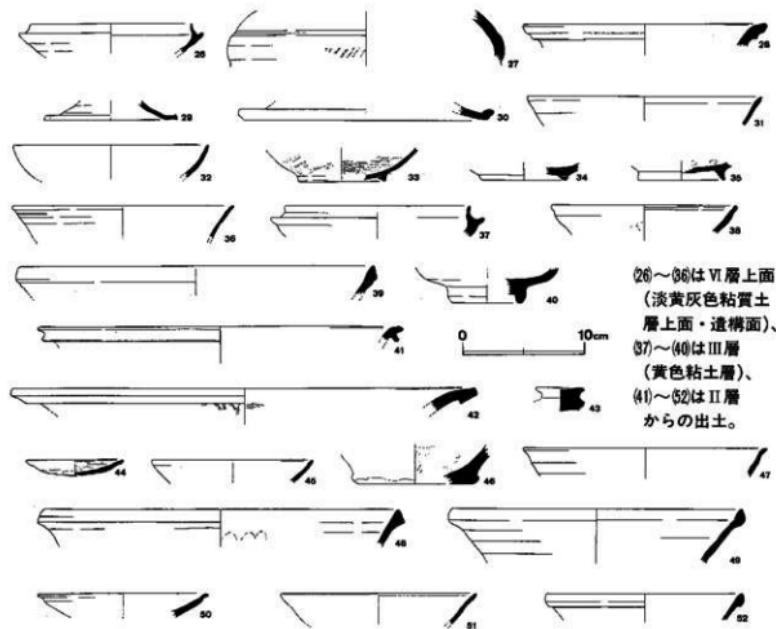
(18)～(19)はピット97、(20)はピット99、

(21)は土坑2、(22)～(23)は小溝群、

(24)～(25)は落ち込み2からの出土。



第27図 出土遺物実測図 (1)



第28図 出土遺物実測図(2)



第29図 出土遺物実測図(3)

### 落ち込み 1

須恵器壺(1)は口縁部が著しく外反し、端部では僅かにくほんだ平坦面をなす。瓦器椀(2)は樟葉型瓦器碗で体部外面は押圧調整し、口縁部では横ナデを行う。端部内面に沈線を施す。須恵器鉢(3)はいわゆる東播系の片口捏ね鉢である。

#### b. 第2次造構面 (第27図 4~25)

##### ピット (第27図 4~21)

土師器椀(8)・(10)・(11)、杯(13)・(15)~(18)、皿(20)、須恵器器台(4)、杯(5)、高杯(14)、壺(9)、黒色土器椀(7)・(19)・(21)、瓦器椀(6)・(12)等を出土する。

このうち、土師器椀(10)は口縁端部に沈線を有し、内弯気味の体部には内外面ともに緻密なヘラミガキを施す。(11)は底部であるが、調整手法等から同一個体の可能性がある。土師器杯(15)~(18)は粗製の土師器杯で、(18)は口径15.2cm、器高4.9cmを測る。底部は平たく断面三角形の高台がつく。体部は斜上方にまっすぐのび、外面に明瞭な指頭圧痕を残す。黒色土器椀(7)・(19)・(21)はいずれもA類で、(19)は口径14.0cm、残存高4.0cmを測り、体部は内弯気味で、内面には緻密なヘラミガキ、外面にはヘラケズリを施す。瓦器椀(6)・(12)は樟葉型瓦器碗である。磨滅が著しく細片であるため調整はわかりにくいが、(6)内外面と(12)内面はヘラミガキ、(12)外面は指頭圧調整がみられる。

##### 小溝群 (第27図22・23)

須恵器杯(22)は受部径15.0cm、残存高1.7cmを測る。口縁部は損なわれているが杯身である。須恵器甕(23)は口径20.0cm、残存高3.3cmを測り、口縁部は丸い。

##### 落ち込み 2 (第27図24・25)

須恵器甕(24)・(25)は、端部が丸く下方に僅かに下る口縁部を有する。(25)は口径19.9cm、残存高32.5cmを測り、体部外面には斜めタテ方向の平行タタキ、内面には同心円タタキを施す。器底には置き台に転用したとみられる蓋杯の痕跡が付着する。

#### c. I層・II層・VI層上面 (第28図26~52)

##### I層 (第28図41~52)

須恵器甕・つまみ・杯・捏ね鉢(41~43・47~49)、土師器皿(44)、瓦器椀(45)、瓦質土器擂鉢(46)、綠釉陶器杯(50)、白磁椀(51・52)等を出土する。

白磁椀(51・52)は口縁部がわずかに外反して端部を覗くおさめる(51)と玉斑状になる(52)とがみられ、(51)では口径16.0cm、残存高2.6cmを測り、(52)は口径16.0cm、残存高2.2cmを測る。(44)はいわゆる「て」の字状口縁皿で、口径8.1cm、器高1.3cmを測り、器厚は4.0mmと厚めである。口縁部は外反させた後、端部をつまみ上げる。体部内外面には指頭圧痕を残す。

##### II層 (第28図37~40)

須恵器蓋杯(37)、瓦器椀(38)、須恵器捏ね鉢(39)、青磁椀(40)等を出土する。

## VI層上面（第28図26～36）

須恵器蓋杯・壺・甕・高杯（26～30）、土師器椀（31～35）、縄釉陶器（36）等を出土する。

縄釉陶器（36）は焼成が須恵質で、口径14.0cm、器高2.0cmを測る。体部は斜め上方にまっすぐのび、口縁端部は丸くおさめる。

## （2）石 器

今回の調査で出土した石器は、打製石鎌1点、打製石匙1点、磨製石製品1点である。（第29図1～3）

1は、調査区西側のVI層上面（淡黄灰色粘土層・遺構面上面）より出土したサヌカイト製の凹基無茎式石鎌で、先端部を欠いているため全長は不明だが現存長は17.2mmである。幅13.3mmの基部には深くはないが明瞭な快入があり、縄文中期から後期のものと思われる。厚さ3.2mm、重さ0.617gを測る。

2は、II層（淡橙褐色粘土層）より出土したサヌカイト製の石匙である。長さは41.9mm、高さ34.5mm、厚さ7.8mmを測り、重さは9.569gである。縄文前期から中期にかけて近畿地方などでみられる横型三角形のものと思われる。

3は、III層（黄褐色粘土層）より出土した泥岩製の磨製石製品で、現存長は47.0mm、現存幅32.0mm、厚さ10.0mmを測り、重さは22.95gである。細片ではあるが、表裏及び側面が3面に遺存し、表面では緩やかな凸状の曲線を描く。磨製石斧もしくは砥石と考えられる。

## 5. ま と め

調査区内の遺構面については、西から東にかけて緩やかに下降する傾斜がみられた。現在の調査地周辺の地形においても、西方を除く他の全ての方向よりも当地が最も高所に当たることから、当調査地が千里丘陵より舌状に延びる微高地上に位置するものと考えられる。

今回検出した遺構面からは、調査区の東側から南側にかけて多くの遺構が発見されたが、このうちピットについては、そのいくつかが建物及び柵列等を構成する柱穴と考えられる。そのうち、建物1～3については、いずれも重複しており、時期の相違が想定された。これらの時期については、柱穴内から出土した黒色土器・樟葉型瓦器椀・粗製土師器杯などの遺物から、建物1・柱列1が9～10世紀頃、建物2・柵列1が10世紀頃、建物3が11世紀後半～12世紀前半頃と考えられる。また、方位については柱列1→建物1→建物2→建物3→（柵列1）のとおりに西へ推移しており、柵列1を除き、建物の時期と方位の推移とがはば一致することから、時期差による土地利用または地形に変化があった可能性が想定される。

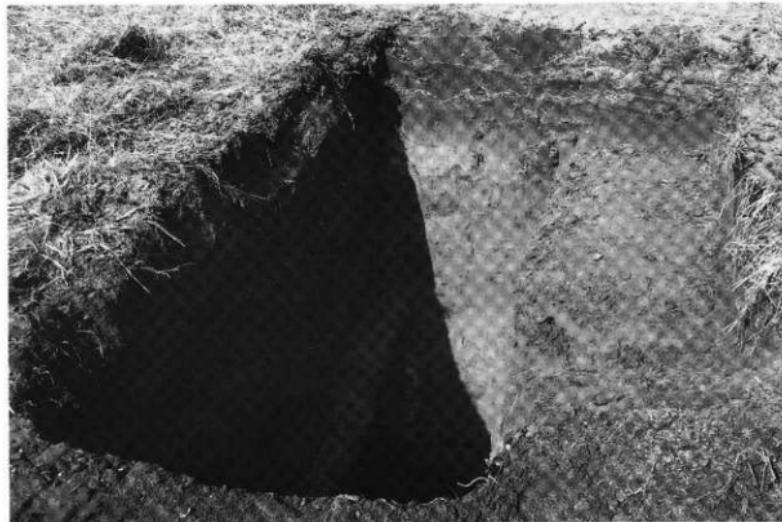
また、遺構面上層の層厚10cm前後の土層（II～IV層）については、いずれの層からも建物跡等の遺構が全く検出されなかったことから、農地等の整地層ではないかと考えられる。また、

この層から出土した土器については、古墳時代の須恵器を多量に含むものの、瓦器椀・瓦質土器などもみられた。のことから、これらの層はいずれも中世以降の所産であり、少なくとも平安時代に営まれていた居住域が他所へ移動したものと考えられる。

なお、これらの遺構及び包含層からは5世紀から7世紀にかけての須恵器が多量に出土した。特に落ち込み2については、古墳時代の土師器・須恵器のみの出土であることから、付近に古墳時代の集落もしくは須恵器生産関係遺構の存在した可能性が考えられる。



G 1 (南から)



G 2 (北から)

図版2

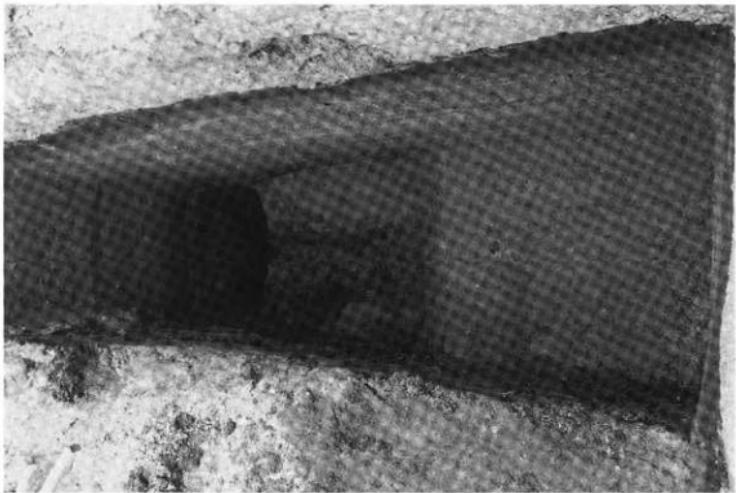
藏人遺跡2次調査



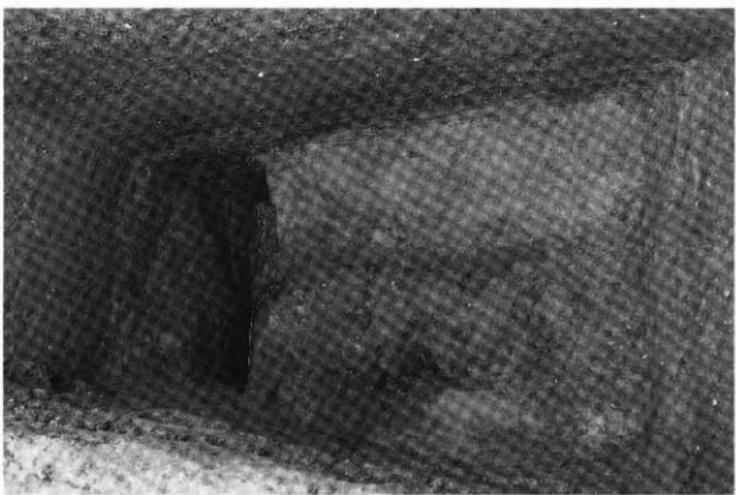
T 1 (西から)



T 3 (南から)



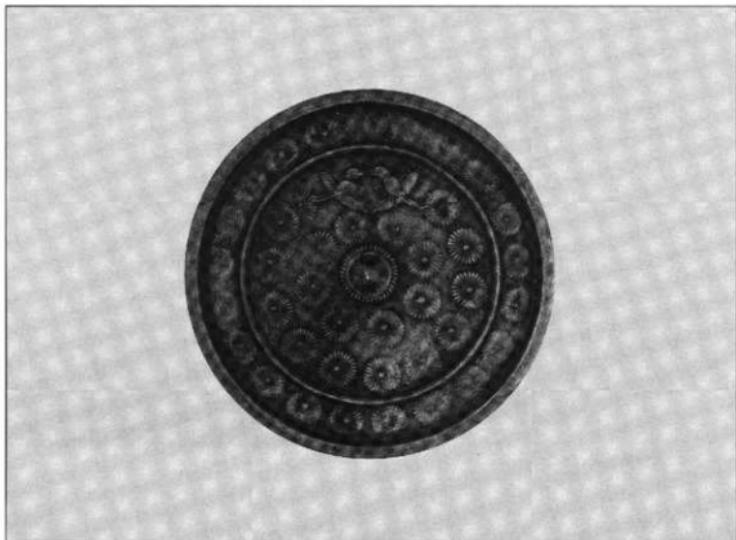
T 4 (南から)



T 4 溝検出状況 (南から)



T 3 鏡出土状況



出土 和 鏡

T 1 (東から)



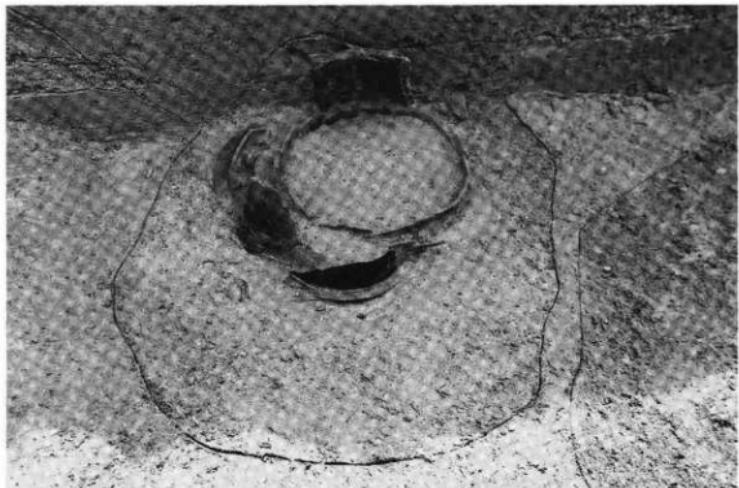
T 2 (西から)



図版 6  
藏人遺跡 3次調査

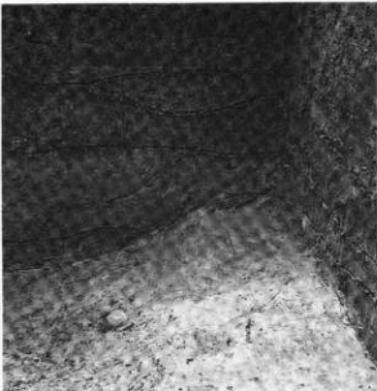


T 3  
遺構検出状況（西から）



T 3 井戸 1 (北から)

図版 7  
藏人遺跡 4次調査



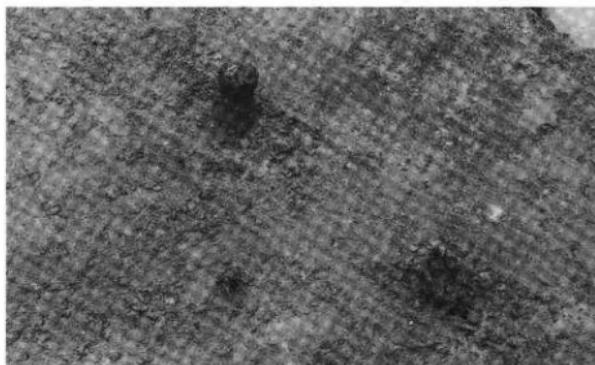
図版 8 垂水遺跡(1)



調査前近景 (北東から)

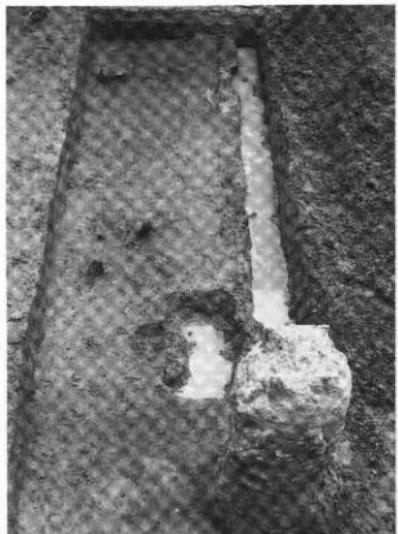


A区1次面調査状況  
(北から)

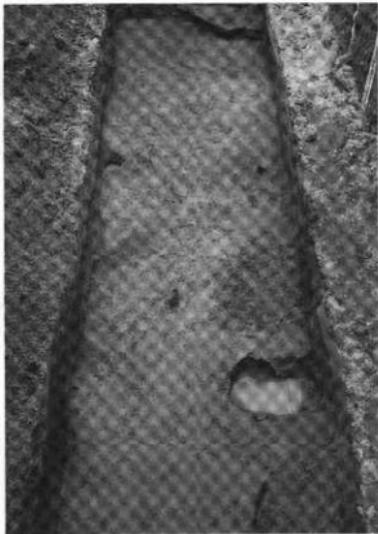


B区1次面杭検出状況  
(K1・K2・K3 北から)

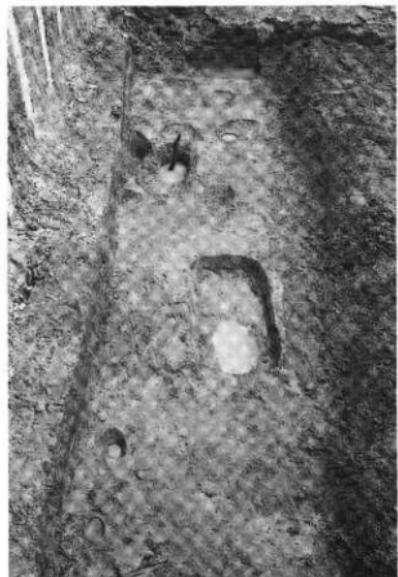
図版 9 垂水遺跡(2)



B区 1次面（南から）



C区 1次面（南から）

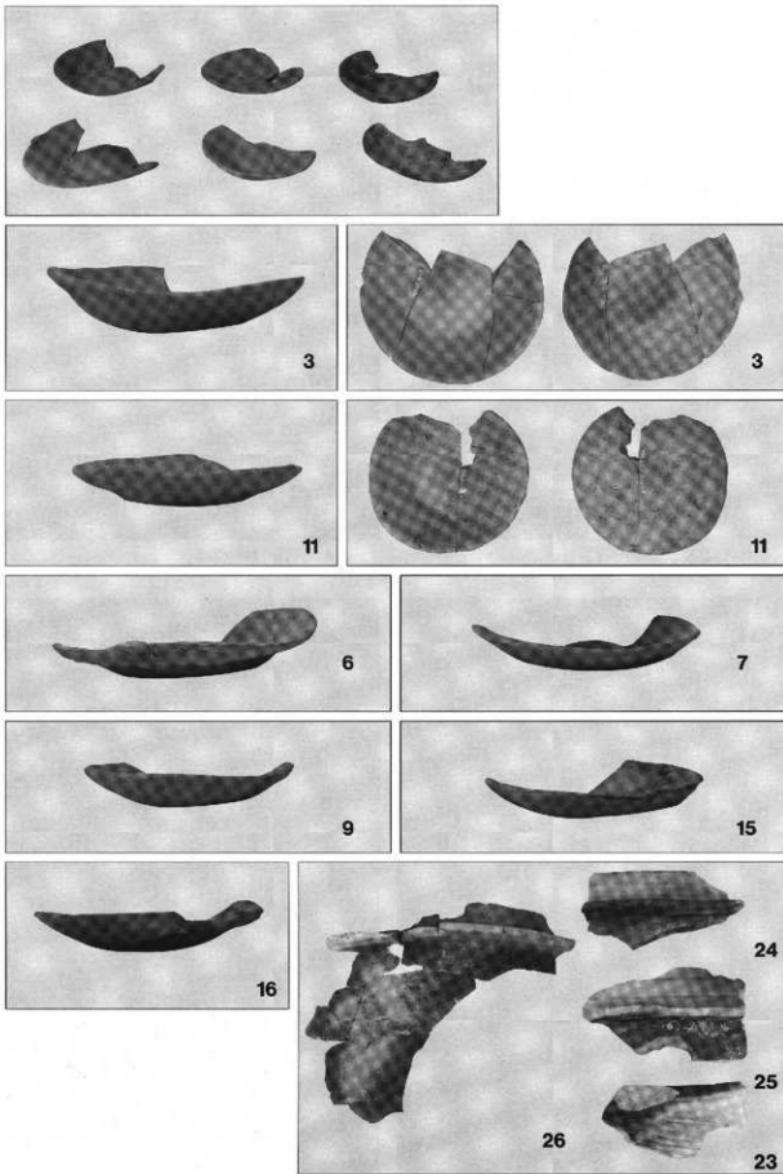


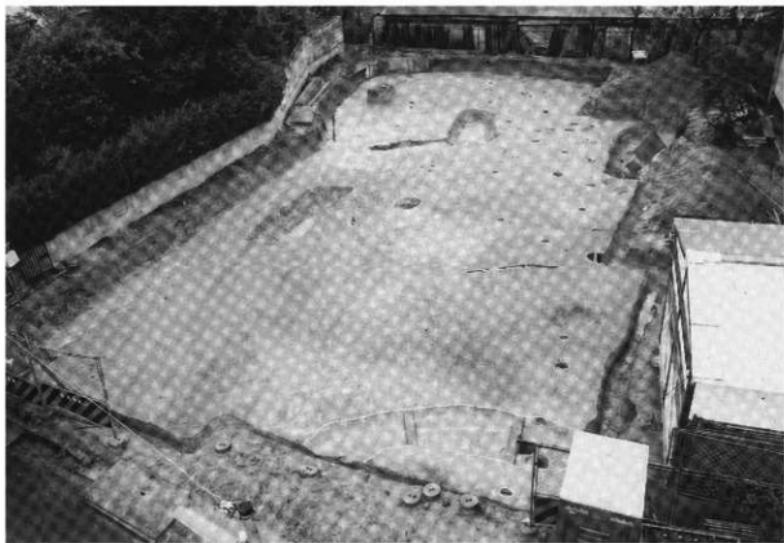
A区 2次面（南から）



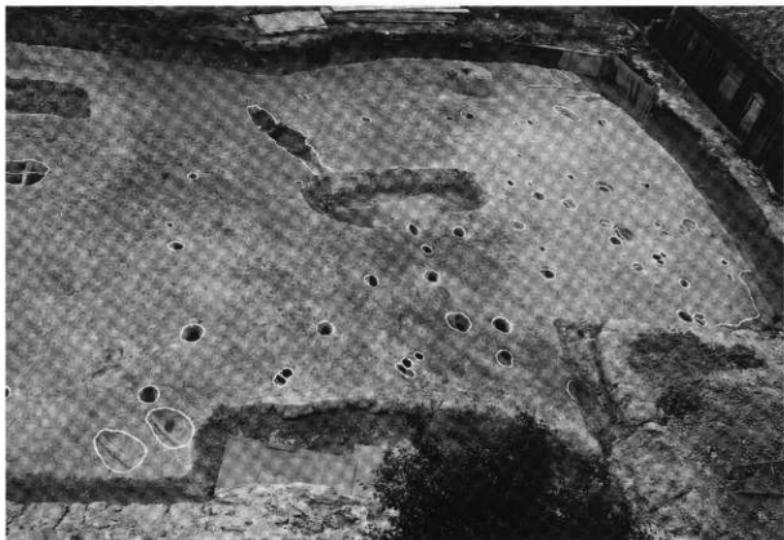
B区 2次面 SD 2（南から）

図版 10  
垂水遺跡出土遺物

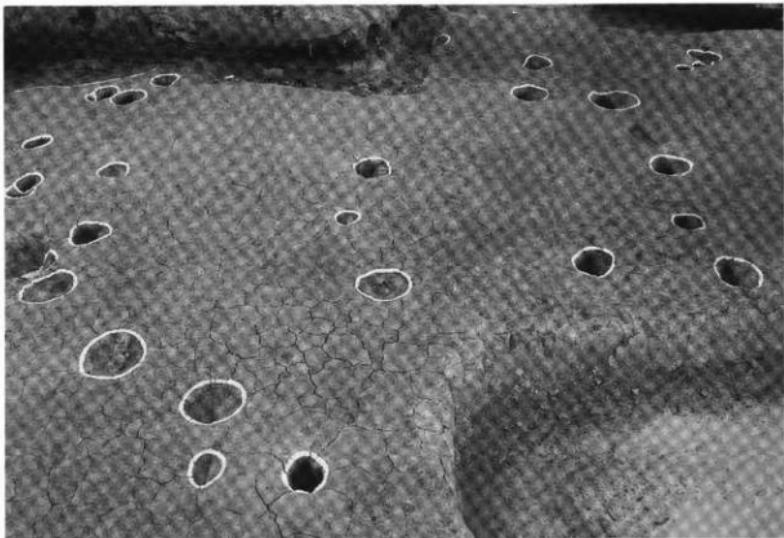




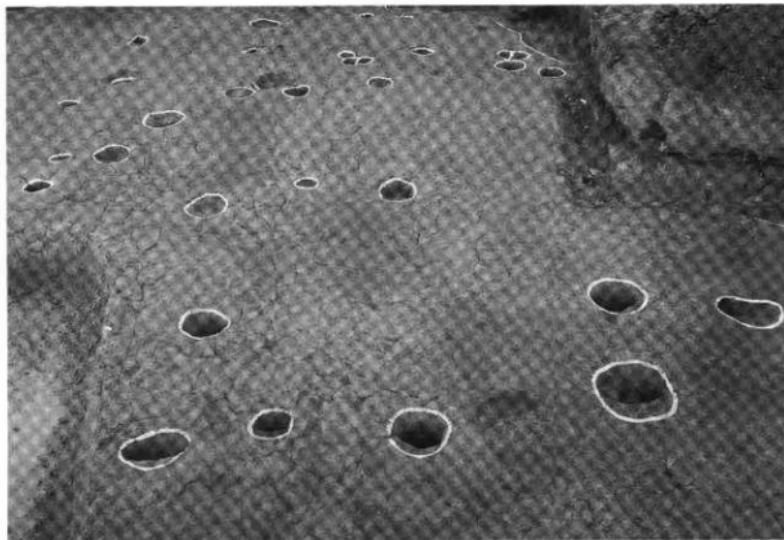
遺構面検出状況（東から）



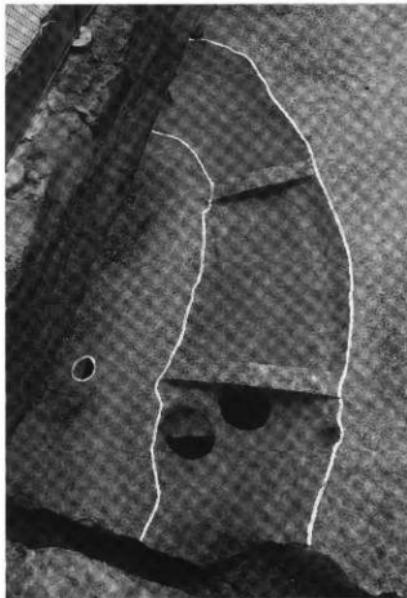
遺構面検出状況（南から）



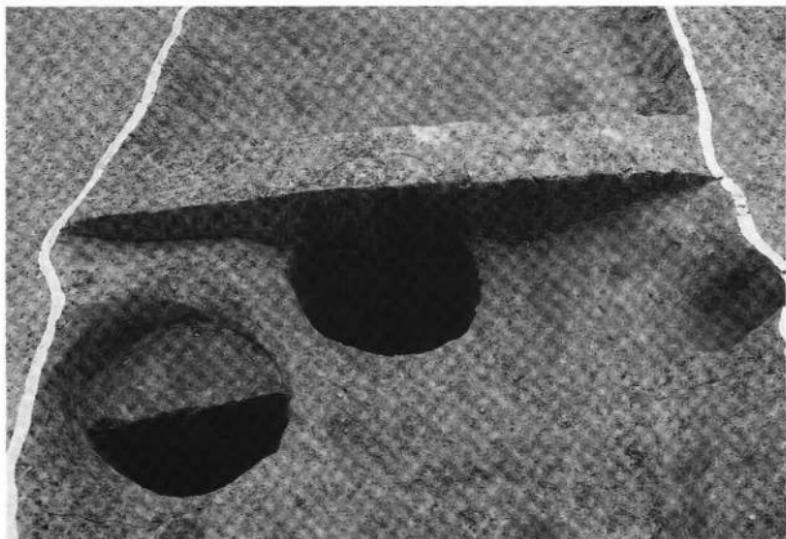
建物跡検出状況（北から）



建物跡検出状況（西から）



溝2検出状況(南から)



溝2細部及びピット検出状況(南から)

図版  
14

片山芝田遺跡（4）

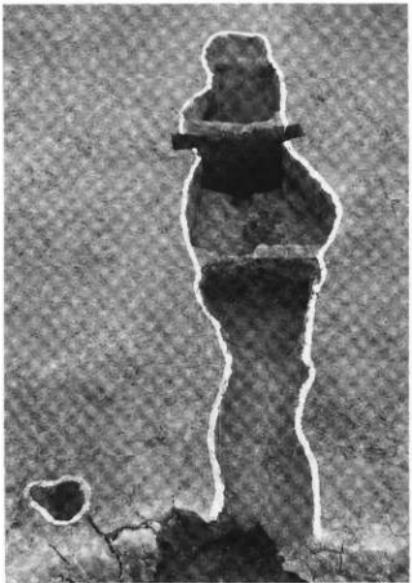
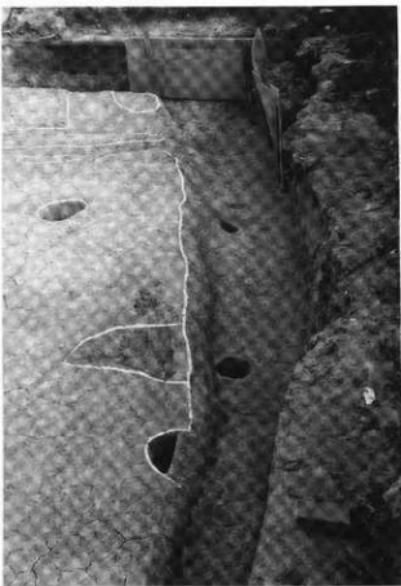
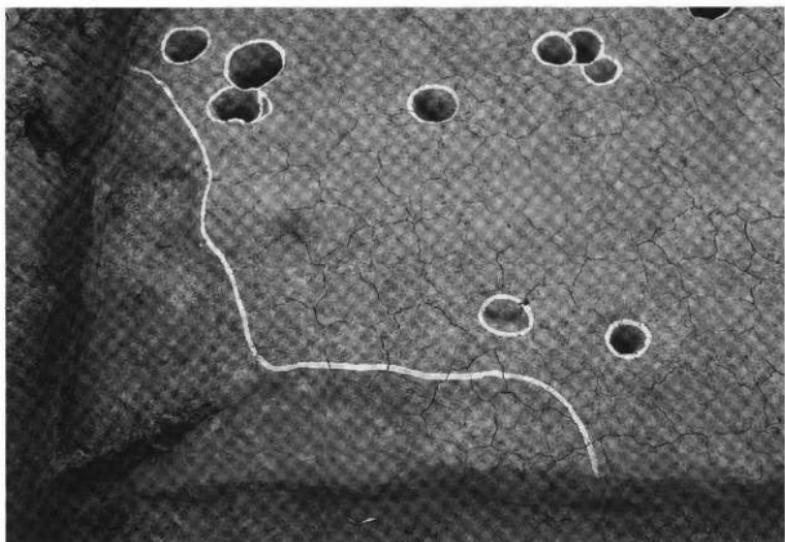


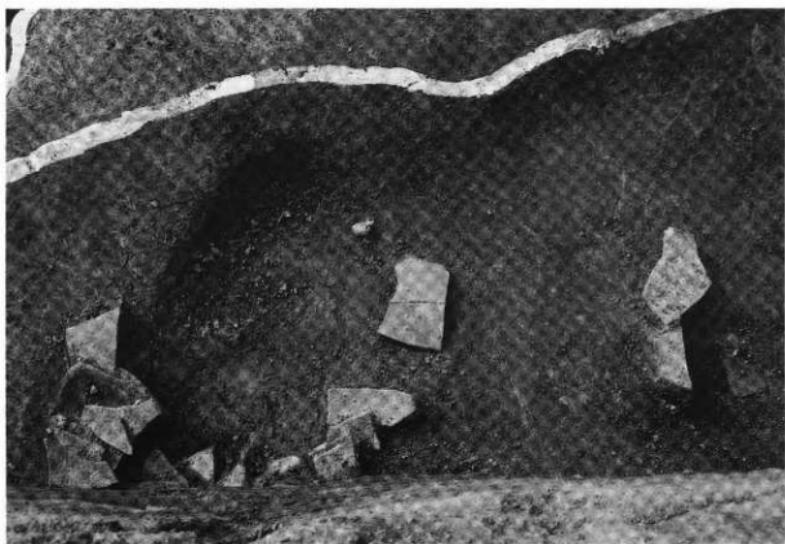
図5 検出状況（南から）



落ち込み1 検出状況（南から）



落ち込み2検出状況（東から）



落ち込み2内出土土器群（南から）